

後撰和歌集
全

085979-000-8

特22-357

後撰和歌集

大中臣能宜/等撰

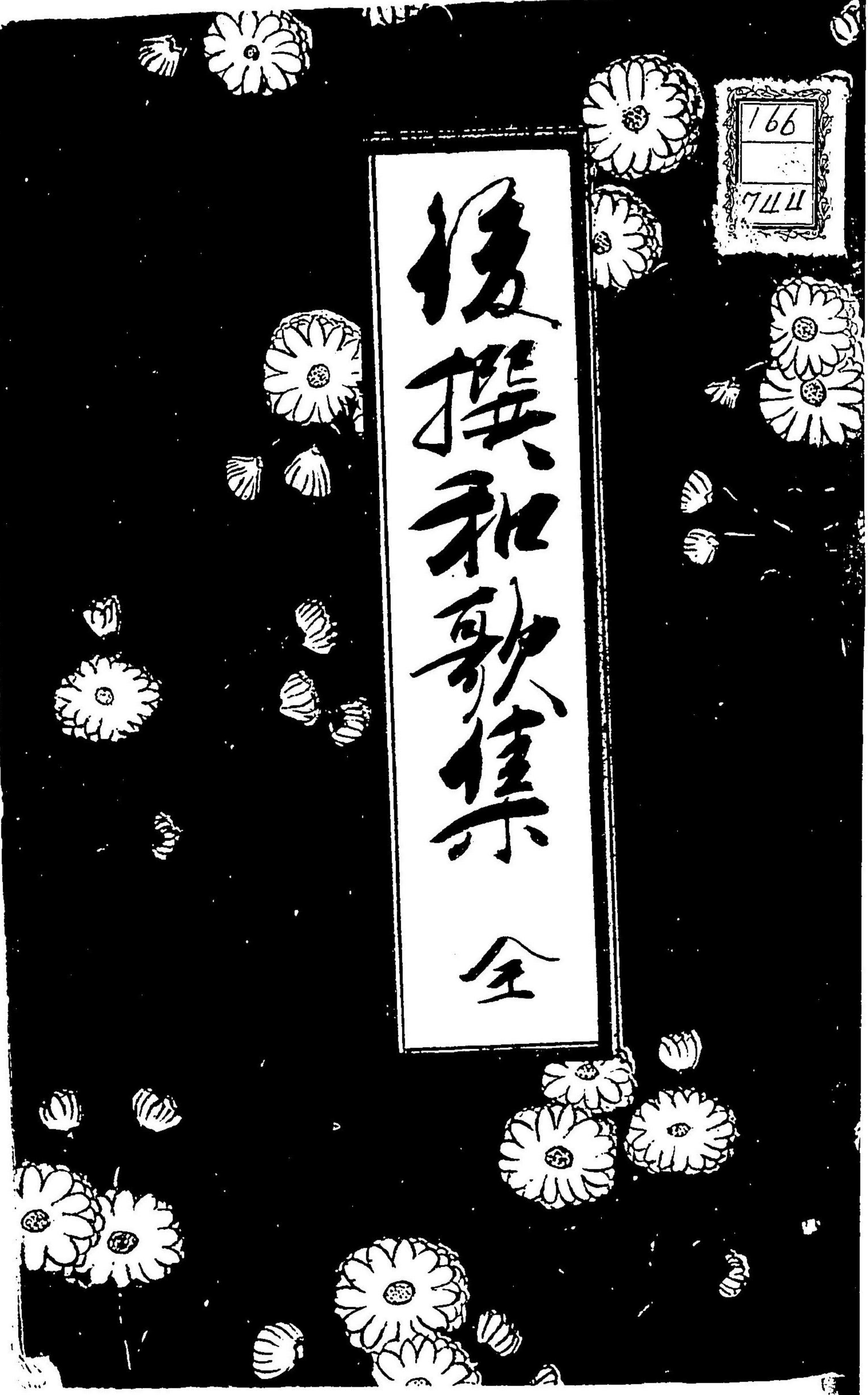
M28

DBD-0606



166
7777

後撰和歌集
全



後撰和歌集卷第一

春歌上

元日に二條のきさの宮にてしろきおほうちさをたまはりて
降雪のみのしろ衣打きつゝ春きにけりどかどろかれぬる
藤原敏行朝臣

春立日よめる

春立と聞つるからに春日山消あへぬ雪の花とみゆらん
けふよりはおきのやけ原かき分て若あつみにと誰をさるはん
凡河内躬恒
兼盛王

ある人のもとににいまいりの女の侍りける

か月日久しくへてむ月のついたちころにま

へゆるされたりけるに雨のふるを見て

白雲のうへしるけふ春雨の降にかひある身とは知ぬる
讀人不知

朱雀院の子日におはしましけるにさはる事

侍りてぬつかうまつらすして延光朝臣につ

かはしける

松もひき若なる摘す成ぬるをいつしか櫻はやもさかきん
左大臣小野宮

院修返し

まつにくる人しまければ春の野のわかきもなにもかひなかりけり

〔一〕

後撰和歌集卷第一



子日に男のもとよりけふは小松ひきになむ
まかりけるといへりければ

讀人不知

霞立春日の野へのわかちにもなり見しかな人も摘やど
子日しにまかりける人れもどにをくれ侍て
つかさしける

みつね

春の野に心をたにもやみぬ身は若きは摘て年を社つめ
宇多院に子日せんと有ければ式部の卿みこ
をさうふとて

行明親王

古郷の野へ見に行どいふめるをいと諸共に若まつみてん
初春の歌とて

きのこのり

水の面にあや吹みたる春風や池の水をけふはどくらん
寛平侍時ささいは宮の歌合のうた

よみ人しらす

吹風や春立さぬと告つらん枝にこもれる花咲にけり
じはすばかりにやまをへことにつきてまか
りける程にやどりて侍ける人の家のむすめ
を思ひかけて侍けれどもやむ事をさきことに

よりてまかりのほりにけりあくる春おやの
もどにつかはしける

みつね

春日野にかふる若ふを見てしよ身心をつぬに思ひやるかま
樂れにける男のもどにうのすみけるかたの
庭の木の枯たりける枝をかりてつかはしけ
る

兼覽王母

もぬ出る木のめを見てもねをさく枯にし枝は春をしらねば
女の宮つかへにまかり出て侍けるにめつら
しき程はこれかれものいひあとし侍けるを
程もさくひとりにあひ侍にければむ月のつ
いたちはかりにいひつかはし侍ける

隨人しらす

いつのまに霞立らん春日野に雪たに舞ぬ冬と見しまに
たいしらす
なをさりに打つる物を梅は花ときかに我やころも染てん

閑院左大臣冬嗣

前裁に紅梅をうへて又のはるをうへ開けれ
は

中納言兼輔朝臣

宿近く移して植しかひもなく遠待にのみ匂ふ花哉
延喜侍歌めしけるに奉りける

春霞たき引にけり久方の月のかつらも花や咲らん

紀貫之

れをし侍時みつし所にさふらむけるころし
つめるよしを歎み侍らんをさせよとれはし
くてある藏人に送りて侍ける十二首からち

いつて共春の光はわかなくにまた三吉野の山は雪降

人のもとにつかはしける

みつね
いせ

白玉をつしむ袖のみなかるは春は涙もさぬけり

人に思られて侍けるころ雨のやますふりけ

れは

讀人しらす

春立て我身降ぬるをかめには人の心の花も散けり

たいしらす

我せこに見せばと思ひし梅花うれ共見す雪のふれは

きて見へき人もあらしを我宿の梅の初花折つくしてん

ことならば折つくしてん梅花わかまつ人のきても見あぐに

吹風にちらすもあらん梅花わかかり衣ひとよとさん

我宿れ梅の初花ひるは雪夜るは月かどみにまかふ哉

梅花よろちから見むわきもかどかむ斗のかにころしめ

梅花ふれはこはれぬ我袖に匂ひかうつせいゑつとにせん

ろせい法師

おどこにづきてはかにうつりて

心もておるかはあやま梅花香をとめてたよ向人のなき

よみ人しらす

としをへて心かけたる女のことしはかりを

たにまぢくらせといをけるか又のどしもつ

れなかりければ

人心うさ社まされ春たてはとます消る雲かくれなん

たいしらす

梅花香を吹かくる春風に心をうめは人やどかめむ

春雨のふらは野山にましりなむ梅の花笠ありといふこ

かきくらし雪は降つししかすかに我家のうのに鶯う鳴

谷寒みいまたすたらぬ鶯の鳴聲わかみ人のすさをぬ

鶯の鳴つる聲にさうはれて花のもとに我はきにける

花たにもまたさか多くに鶯の鳴一聲を春と思はん

君かため山田の澤にゑくつむとぬれにし袖は今もかはかす

あひしりて侍ける人の家にまかれりけるに

梅の木侍けりこの花咲なむとさかあらすせ

うろこせんといひけるを音なく侍ければ

梅花今は盛にちりぬらんだのめし人のをどつれもせぬ

朱雀院の兵部卿のみこ

返し

春雨にいかにもむめや匂ふらんわが見る枝は色もかはらす

中納言長谷雄朝臣

梅花ちるてふなくは春雨の降てつしなく鶯の聲

よみ人しらす

かよひすみ侍ける人のいろのまへなる柳を
思ひやりて

いもか家のはひ入にたてる青柳ふ今や鳴らん鶯のこゑ

みつね

松のもとにこれかれ侍りて花を見やりて

ふかみどりとききは松の影にゐてうつろふ花をよりに社みれ

坂上是則

花の色はちらぬまはかり古郷につねには松のみどりけり

藤原雅正

紅梅のはさを見て

紅に色をはかへて梅の花かろことくは匂はさりけり

みつね

これかれまどゐしてさけたうへけるまへに

梅花に雪のふりかゝりけるを

貫之

降雪はかつもけならん梅花ちるにまどはす折てかさらん

兼輔朝臣のねやれまへに紅梅を植て侍ける

を三とせはかりの後花さきなどしけるを女

ともろの技を折てみすの内より是はいか

といひなして侍れば

春とに咲まさるへき花なれば今年をも又あかすどうみる

はしめて宰相に成て侍けるとしにあらん

後撰和歌集卷第二

春歌中

としおひて後むめのはさうへてあくるとし

のはる思ふところありて

植し時花みんとしも思はぬに咲ちかみればよはを老にけり

藤原朝臣

ねやのまへに竹のある所にやどり侍て

竹近く夜床ねはせし鶯の鳴聲さけは朝いさくれす

藤原伊衡朝臣

やまどのふるの山をまかるとて

いろの神ふるの山への櫻花うへけむ時をしる人うなき

僧正遍昭

花山にて道俗さけたうへけるかりに

山守はいはいはさむ高砂の尾上の櫻ありてかざらん

素性法師

はしたりければ

櫻花色はひとしき枝をれどかたみに見ればさくさままなくに

よみ人しらす

返し

見ぬ人のかた見かてらはからさうき身にさうらへる花にしあらぬは

いせ

櫻の花をよめる

吹風をまらしの山の櫻花のとけくろみるちらしと思へは

讀人不知

前栽に竹の中に櫻の咲たるを見て

櫻花けふよく見てんくれ竹の一みの程ふちりもこうすれ

坂上是則

題しらす

さくら花匂ふともなく春くれはなとか歎のしけりのみする

讀人しらす

貞観時ゆみのわざつかうまつりけるに

けふさくらしづくに我身いさぬれんかこめにさうふ風はこぬまに

河原左大臣

家よりとどき所よまかる時前栽のさくら

花にゆひつけ侍ける

櫻花ぬしを忘れ物あらはふさこん風にことつてはせよ

藤原右大臣

春の心を

青柳の糸よりはへてをるはたをいつれの山の鶯かさる

いせ

はなのちるを見て

あひ思はてうつろふ色をみる物を花にしられぬ詠する哉

凡河内躬恒

歸鴈を聞て

かへるかり雲ちにまどふ聲す霞吹とけこのめ春風

讀人知不

朱雀院の櫻のおもしろき事と延光朝臣のか

たり侍ければ見るやうもあらまし物をなと

むかしを思ひ出て

咲さかす我にな告る櫻花人つてあやはきかむと思ひし

大將彦息所

たいしらす

春くれは木かくれおほき夕つきよおほつかあくも花陰にして

讀人しらす

立はたる霞のみかは山高み見ゆる櫻の色もをどつを

大空におほふばかりの袖もかき春咲はなを風にまかせし

やよひのついたりたちここに女につかはしけ

る

歎さへ春をしるしうれしけれもゆとは人に見ぬものから

春雨のふると思ひのきにもせていとまけ

きのめをもやすらんだといふふる歌は心はへを

女にいつかはしたりければ

もへわたる歎は春のさかなれば大かたにこそ哀ども見れ

女のもとにつかはしける

青柳の糸つれなくも成ゆぐかいかあるすちに思よらまし

藤原師尹朝臣

衛門れみやす所は家うつまさに侍けるにう

この花おもしろかなりとて折につかはした
りければさこへたりける

山里にちりおましかは櫻花匂ふさかりもしられさらまし

返す

句ひこき花れかもてうしられけるうへてみるらん人れ心は

小貳につかはしける

ときしもあれ花の盛につらければ思はぬ山に入やしなまし

返す

我ために思はぬ山の音にのみ花さかり行春を恨ん

題しらす

春のいけの玉もにあふふには鳥のあいのいとあす戀もする哉

寛平時花の色霞にこめて見せずといふ心

を讀て奉れどねはせられければ

山風の花のかしとふふもどには春の霞うはたしこける

たいしらす

春雨のよにふりぬたる心にも猶あたらしく花をこる思へ

京極のみやす所にをくり侍ける

春霞立て雲井ふなり行はかりの心のかはるるべし

藤原朝忠朝臣

宮道高風

藤原奥風

諺人不知

題しらす

ねられぬをしみて我ぬる春のよれ夢を現になすよしもかか

忍びたりける男のもとに春行幸有へしとき

いてさうろくくくたりてうしてつかはすと

て櫻色のしたかさねにうへて侍ける

我宿の櫻の色はうすく其花の盛はまてもれらなん

忘れ侍にける人の家に花をこふとて

年をへて花れたよりよこといはいどいわたなる名をや立なん

よふと鳥を聞てとなりの方に家に送り侍ける

我宿の花にあきりよふと鳥よふかをも有て君もこなぐに

壬生忠岑か左近はつかひのおさにてふみを

こせて侍けるつゐてに身を恨み侍ける返事

に

ふりぬとていたくな佐る春雨のたぐにやむへき物あらなくに

後撰和歌集巻第三

春歌下

贈太政大臣のひわかれて後ある所にてもの

こゑをきよてつかはしける

兼覽王

春道つらき

紀貫之

鶯のさくさる聲は昔にて我身ひとつのあすも有かあ

さくらのほなれかめにさせりけるか散ける

を見て中務につかはしける

久しかれわたに散など櫻花かめにさせれとうつろひみけり

返し

千代ふへきかめにさせれと櫻花とまらむ事は常にやあらぬ

たにしらす

散ぬへき花のかきりはをしなへていつれ共なく惜き春哉

朝光朝臣とまりに侍けるに櫻のいたらちり

ければいひつかはしける

垣こしに散くる花を見るよりはねこめに風の吹もこきなん

女につかはしける

春の日のあかき思ひは思しを人の心に秋や立らん

たいしらす

よろにても花見るとに音をうそく我身にうとをき春のつらさに

風をたに待てる花の散をまし思からにうつろふかうき

ぬれたる所にすみ侍ける女つれづれにわらへ

い侍ければ庭にある萱の花をつみていそつ

藤原顯忠朝臣母

貫之

讀人しらす

いせ

讀人不知

つらゆき

かはしける

我やとにすみれの花のおはかれはさやとる人やあると待哉

題不知

山高み霞を分てちる花を雪とやよりの様はみつらん

吹風のさるふ物とはしりあから散ぬる花のしめて戀しき

打はへて春はさばかり長閑さを花の心やなにかうへらん

つねにせうろこつかはしける女友立のものと

より櫻の花のいと面白かりける枝をむりて

これゑこの花に見くらへよと有ければ

我宿の歎は春もしらなくになにか花をくらへてもみん

ちりのみこの心させるやうにもあられてつね

に物思ひける人にてなんありける

春のいけのほとりにて

はるの日の影ろふ池の鏡には柳のまゆるまつは見とける

春の暮にかれこれ花かしみける所にて

かくなからちらてよをやはつくしてぬ花のときはもありとみるへく

延喜時殿上のをのこどものおかじめしあ

けられてをのくかさしさしける次に

讀人不知

清原ふかやふ

こわかきみ

讀人しらす

かさせとも花もかへれぬこの春も花のおもてはふせつへらなる

凡河内躬恒

たいしらす

一とせにかさなる春のあらはころふたゝひ花を見むと頼まめ

頼人しらす

花のもとにてかれこれ程もなく散るおとす
けるつゐてに

春くれば咲てふことをぬれ衣にさする斗りの花にろ有ける

貫之

春花見に出たりけるを見つけてふみをつか

はしたりける其返事もなかりければあくる

あした昨日の返事とこひにまうてきたりけ

れはいひつかはしたりけり

春霞立ちから見し花ゆへにふ見とめてける跡の悔しさ

讀人不知

おどこのもとよりたのめをこせて侍けれ

ば

春日さす藤のうらはのうらとけて君し思はし我も頼まん

たいしらす

驚に身をあひかへはちる迄もわか物にして花はみてまし

もとよしのみこと兼茂朝臣の娘にすみ侍け

るを法皇のめしてかの院にさふらひければ

いとせ

いあふ事も侍らさうければ明るとしの春櫻

れ枝にさしてかのさうじにさしをかせける

花の色は昔ながらに見し人の心れみさうつろひにけれ

もとよしみこ

月のおもころかりける夜櫻を見て

あたらよの月と花とをおましくは心しれらん人に見せはや

源さねあきら

あかたのむとゝいふ家より藤原治方よりつ

かはしけり

宮こ人きてもならふむ蛙さくわかれの井どの山吹のはな

橘公平女

すけのふか母身まかりて後もときくかの

家に敦忠朝臣のまかりかよひけるにさくら

の花のちりけるおりにまかりて木のもとに

侍ければ家の人のいひいたしける

今よりは風にまかさん櫻花ちる木のもとに君とまりけり

よみ人しらす

返し

風にしもまにかまかせむ櫻花匂ひあかねにちかはうかりさ

敦忠朝臣

櫻川といふ所ありとききて

常よりも春へにまれば櫻川あみの花こてまふくやすらめ

貫之

前裁に山吹ある所にて

わかきたかきとへ衣は山吹の八重は色にもおどりたりけり

兼輔朝臣

一とせに二たひさかぬ花なればむへちることを人はいをけり

在原元方

寛平時櫻のはなの宴ありけるに雨のふり侍ければ

藤原敏行朝臣

春雨の花の枝よりなかれこは猶こすぬれめかもや移と
いつみのくにまかりけるにうみのつらに

讀人しらす

春ふかき色にも有や住のえのうこもみどりに見ゆるはま松
女ども花見んとて野へにいて
春くれは花見んと思ふ心して野への霞ととも立けれ

典侍よるかの朝臣

あひしれりける人の久しうとはさりければ
花盛につかはしける

讀人しらす

我をこそ思ふにうからめ春霞花につけても立よらぬ哉

讀人しらす

立よらめ春の霞を頼まれよ花のあたりとみればあるらん
山櫻を折て送り侍とて

源清蔭朝臣

君見よと尋ておれる山櫻ふりにし色と思はさるるむ

讀人しらす

こゝろにすみて京のともなちのものとつかは
しける

神さひてふりにし里にすむ人は都に匂ふ花をたにみす
法師にならん的心ありける人やまどにまか
うて程久敷侍て後あひしりて侍ける人のも

よみ人しらす

とよ月之るはいかには花は咲たりやとい
ひて侍ければ

みしの吉の山の櫻花白雲とのみみまかひつゝ
亭子院歌合のうた

山櫻咲ぬる時は常なりも望の白雲立まさりけり

山櫻を見て

白雲とみへつる物を櫻花けふはちるとや色とになる

貫之

我宿のかけとも頼む藤の花立よりてもなみにおらるな

讀人しらす

花さかりまたも過ぬに吉野川陰はうつるふ岸の山吹
人の心たのみかたさうければ山ふきのち
りさしたるをこれ見よとてつかはしける

忍かねるきて蛙のおしむをもしらすうつろふ山吹のはな

彌生斗の花のさかりに道まかりけるに

かりつればたふさにけかたくなからみよれ佛に花たてまつる

たいしらす

水うこの色さへふかき松がぬに千年をかねてさける藤浪

やよひの下の十日はかりに三條右大臣兼輔

朝臣の家にまかり渡りて侍けるに藤の花さ

けりやり水のほとりにてかれこれほみき

たうへけるついでよ

僧正遍昭

讀人不知

隈なき名におふ藤の花なればうこももしらぬ色のふかきか

色深く匂ひし事は藤浪の立もかへらて君とまれとは

さはさせと深さもしらぬふちあれば色をも人もしらしどろおもふ

ことふさみ事としてあろひ物かたりあとし

侍ける程に夜更にければまかりとまりて又

のあしたに

昨日見し花のかほとて朝見ればねてころうらに色まさりけれ

一夜のみねてしからへは藤の花心どけたか色見せんやは

朝ほらけ下行水は浅けれと深くろ花の色は見ぬける

三條右大臣

兼輔朝臣

貫之

三條右大臣

兼輔朝臣

貫之

題不知

鶯の糸によるてふ玉柳吹なみたりる春の山風

櫻の花のちるを見て

いつのまに敷はてぬらん櫻花面影にのみ色を見せつゝ

あつみの見この花見侍ける所にて

散事のうきも忘れて哀てうことを櫻にやとしつる哉

櫻のちるを見て

櫻色ふきたる衣のふるければ過る月日もおしけくもなし

彌生にうるふ月ある年つかさめしのころす

みにろへて左大臣家あつかはしける

あまりさへ有て行へき年たにも春に必あふよしもかな

返し

つねよりものどけかるべき春をれば光に人のあはさらめやは

つねよまうてきかよむけるところにさはり

事侍りて久しくまてきあすしてどしかへ

りにけりあくるはるやよひのつこもりにつ

かはしけり

君こそすて年は暮にき立かへり春さへけふにかりにけるかな

讀人不知

みつね

源仲宣朝臣

讀人不知

貫之

左大臣

藤原雅正

ともにごう花をも見めと待人のこぬ物ゆへに惜き春かな

返し

君にたにぞこれてふれば藤の花たうかれ時もしらす有ける
八重むくら心のうちによかけれと花みにゆかむ出立もせず
たらしちす

貫 之

惜めども春の限のさふの又た夕暮にさへありにける哉
行さきを惜し春のあすよりはさにし方に成ぬへき哉

讀 人 不 知
み つ ぬ

行さきになりもやすると頼しを春の限はけふにそありける
はさあらは何かは春のおしからんくる共けふはあけかさらまし
暮て又あすとたにあき春の日を花の陰にでけふはくらさん

貫 之
讀 人 不 知
み つ ぬ

三月のつこもりの日久しうまくてこぬよし
いひではんふるふみのおくにかさつげ侍け
る

又もこん時うととへと頼まれぬ我身にしあれば惜き春かな

つ ら ゆ き

貫之かくてあさしとしにまん身まかりにけ
り

後撰和歌集巻第四

夏歌

題しらす

けふよりは夏の衣に成ぬれとさる人さへはかたらさりけり

讀 人 不 知

卯の花れさける垣ねの月さよみいねすきけとや鳴時鳥

卯月はかり友たちのすみ侍ける所近く侍て
かならすせうろこつかはしてんと侍けるに
をとなくあり侍ければ

郭公さゝる垣ねはちりまから待遠にのみ聲のさこえぬ

返し

時鳥聲侍程は遠からて忍ひに鳴をきかぬあるらん

物いひつかはし侍ける人のつれなく侍けれ
はるの家の垣ねれ卯の花を折ていひ入て侍
ける

うらめしき君か垣ねの卯花はうしとみつゝも猶頼む哉

返し

うき物と思しりなは卯花のさける垣ねも暮さらまし

卯のはなのかきねあるいゑにて

時わかすふれる雪かどみる途に垣ねまたはにさける卯花

友立のどふらをまてこぬ事を恨みつかはす
とて

白妙に匂ふ垣ねのうの花のうくもきてとふ人のなき哉
時わかす月か雪かどみる途に垣ねのまゝにさける匂花
なき佗ぬいつちかゆかむ郭公猶匂花の影ははなれし

卯月斗の月おもしろかりける夜人はつかは
しける

あをみしもまたみぬ戀も時鳥月にさくようよにさりける
女のもとにつかはしける

ありとのみ音羽の山の郭公さくにきこえてあはする有哉
題しよす

木かくれてさ月待共時鳥はねおらはしに枝うつりせよ

藤原のかつみの命婦にすみ侍けるれとこ人
のてに移り侍にける又のどしかさつはたに
つけてかつみにつかはしける

いひろめし昔の宿のかきつはた色はかりころ形見せけれ
かむれまつりの物見侍ける女のくるまにい
ひ入て侍ける

良降義方朝臣

い せ

行かへるやううち人の玉かつらかけてす頼むあふひてふなを

誼人不知

ゆふたすきかけてもいふなわた人のあふひてふあはみろきにろせし
たいしらす

このころは五月雨近み時鳥思をみたれてなかぬ日るあき
待人と誰をくなくに郭公思ひの外にまかはうからん
匂をのこ散にし花をれもはゆる夏は緑のはのみしければ

朱雀院の春宮におはしましける時たちはき

五月をかり修書所にまかりてさけなどた

うへてこれかれうたよみけるに

五月雨に春の宮人くる時わ時鳥をやうくひすにせん

夏夜ふかやぶがことひくをきよて

みしか夜のふけゆくまゝに高砂沓の春風ふくかどぞ聞

あふも心を

足奥の山下水は行かよひことこのねにさへありぬへらなり

題不知

夏の上はあふきのみして敷妙のちりからふまに明うしにける

夢よりもはかなき物は夏の夜の糖かたのわかれさうけり

貫 之

藤原兼輔朝臣

大春日師範

藤原高經朝臣

みふのたゝみね

あまにりて侍ける中のかれもこれ心なし
はありなからつゝむ事ありてえあはさりけ
れは

よもなから思ひしよりも夏の夜のみはてぬ夢うはかなかりける

夏の夜はし物かたりしてかへりにける人

二聲をきくとばなしに時鳥夜ふかくめをもさましつる哉

人のもとにつかはしける

あふとみし夢にならひて夏は日の暮かたきをも歎つる哉
うとまるゝ心しなくは郭公あかぬ別にけさはなかまし

愚ふ事侍けるころはどゝきすをきいて

あまうへて君をのみろなく郭公しけき歎の枝ことにて
四五月はかり遠き國へまかりくたらんどす
あるころはどゝきすをきいて

郭公きけはたひとや鳴渡る我は別のおしき宮こそ

題不知

獨りて物思ふ我を時鳥こゝにしもなくこゝろあるらし
玉くしけおけつる程の郭公たゝ二聲もききてこし哉

讀人不知

いせ

藤原安國
讀人不知

五月はかりに物いふ女につかはしける
數ならぬ我三山への郭公木葉かくれの聲はきこゆや

題不知

どこ夏に鳴てもへなむ時鳥しけきみ山になにかへるらん
ふすからにまつゆ侘しき郭公鳴もはてぬに明る夜なれば

三條右大臣少將に侍ける時しのびにかよふ
所侍けるをうへのをのことも五六人はかり

五月のあか雨すこしやみて月おほろけける
にさけたうへんとてをし入て侍けるを少將

はかれかたにて侍らざりければたちやすら
ひてあるしいたせるとたはふれ侍ければ

五月雨に詠めくらせる月おれはさやかにみえず雲かくれつゝ

あるしの女

女こもて侍ける人におもふ心侍てつかはし
ける

ふたはより我しめゆひし撫子の花のさかりを人におらすあ

讀人不知

足引の山時鳥打はへて誰かまさと音をのみろなく

たいしらす

五月あか雨のころ久しくたむ侍にける女の

もどにまかりたりければ
つれくゞと詠る空の郭公とふにつけてうねはなかれける
題しらす

女

色かへぬ花立は赤に杜鵑千世をなきけるこゑきこゆあり
旅ねして妻こひすらし時鳥神なひ山にさよ更てさく
夏の上に戀しき人のかをどめはこを橋ろしるへまりける
女の物みにまかりたりけるにこと車かたは
らにきたりけるに物なといひかはして後に
つかはしける

い

せ

郭公はつかある音を聞きめてあらぬもろれどおほめかれつゝ
五月ふたつ侍けるに思ふ事侍て

五月雨のつゞける年の詠には物思ひあへる我ろ怪しき

讀人不知

女よいとしのひて物いひてかへりて

杜鵑一聲に明る夏夜のあかつきかたやあふこあるらん

題しらす

打はへて音を鳴くらす空蟬のむなしき戀も我はする哉
つねもなき夏の草葉にをく露を命と頼む蟬のこかきさ
八重葎しけき宿には夏虫の聲より外にとふ人もなし

空蟬の聲さくからに物ろ思ふ我もむるしきよにしすまへば

人のもどにつかはしける

藤原師尹朝臣

いかにせん小倉の山の郭公おほつがあしと聲をのみろなく
たいしらす

讀人不知

時鳥曉方の一聲はうさよのなかをすくすありけり
人しれすわかしめしのゝ撫子は花咲ぬへき時ろきにける
我宿の垣ねにうへし撫子はこなになかかんよろへつゝみん
どこ夏の花をたにみはことなしに過す月日もみしかかりあん
床夏に思ひ多めては人しれぬ心のほとは色にみぬあん
返し

色どいへはこきもらすきも頼まれすやまと撫子散よなしやは

師尹朝臣のまたわらはにて侍ける時どこ夏

の花をおもてもちて侍ければこの花につけ

て内侍のかみのかたにをくり侍ける

撫子はいつれ共なく句へどもをくれでさくは哀ありけり

太政大臣

たいしらす

ふてしこの花ちりかたに成にけり我待秋ろちかくなるらし
宵ちから盡おもあらん夏なれば待暮すまの程なかるへき

讀人不知

夏の夜の月は程なく明ぬれと朝れまをうかこちよせつる
かさゝきの峰こひこえて鳴ゆけと夏の夜渡る月うかくる
秋近み夏果ゆけは郭公鳴聲かたき心ちころすれ

かつらのみこの螢をどらへてといひ侍けれ
はわらはのかさみのうてにつしみて

つゝめともかくれぬ物は夏虫の身よりおまれる思ひ之けり
題不知

天川水まさるらし夏の上はなかるし月のよとむまもなし
月ころはつらふ事ありてまかりありきもせ

てまてこぬよしひてふみれおくお
花もちち郭公さへいぬる迄きみにもゆかす成にける哉

返し
花鳥の色をも音をも徒に物うがる身はすくすのみ也

題しらす
夏虫の身をたぎすてし玉しおらは我とまねはん人めもるみろ

夏夜月おもしろく侍けるに
今夜かくさかむる袖の露けきは月け霜おや秋とみるらん

みな月ばらへしにかてらにまかりいてし月

貫之

藤原雅正

讀人不知

のわかきをみて

かみ川の水底すみて照月を行てみむとや夏ばらへする

みそ月ふたつありけるとし

七夕は天のかはらをまいかへり後のみろかをみろきにはせよ

後撰和歌集卷第五

秋歌上

惟貞の彦子の家の歌合に

俄にも風のすししく成ぬるか秋たつ日はむへもいひけり

題しらす

打つけに物ろ悲しき木葉ちる秋のはしめをけふろと思へば

もの思ひけるころ秋立日人につかはしける

頼めてし君はつれなき秋風はけふより吹ぬ我身かなしも

思ふ事侍けるころ

いとしく物思ふ宿の萩のはに秋風つけつる風の侘しき

題不知

秋風の打吹ろむる夕暮は雲に心ろ侘しかりける

露かけし袂はすまもなき物をかき秋空のまたき咲らん

女れもとより文月はかりにいひをこせて侍

大江千里

讀人不知

いとしく物思ふ宿の萩のはに秋風つけつる風の侘しき

題不知

秋風の打吹ろむる夕暮は雲に心ろ侘しかりける

露かけし袂はすまもなき物をかき秋空のまたき咲らん

女れもとより文月はかりにいひをこせて侍

ける

秋萩をいろとる風の吹ぬれば人の心もうたかはれけり

讀人不知

返し

秋萩を色とる風は吹ぬ共心はかれし草はならねは

在原業平朝臣

源昇朝臣時まかりかよひける時にみ月の

四五日斗なぬかの日のれうにさうろくてう

してといひつかはして侍りければ

あふことは七夕つめにひとしくてたちぬふわさはあへすなりける

閑院

題不知

天川わたらん空もかもほねすたぬ別とおもふ物から

讀人不知

七月七日にゆふかた迄こんといひて侍ける

に雨ふり侍りければまでこて

雨降て水まさりけり天川こよいはよろにこひんどやみし

源中正

返し

水まさりあさき瀬しらす成ぬともあまのどわたる舟はなしやは

讀人不知

赤ぬかの日に女のもどにつかわしける

七夕もあふよありけり天川このわたりにはわたるせもなし

藤原兼三

かれにける男の七夕の夜まできたりければ

女のみみて侍けり

ひこはしの秋にあふよの床夏は打はらへ共露けかありけり

讀人不知

なぬか人のもどより返事にこよひあはすと

いひをこせて侍りければ

こひくであはんと思ふ夕暮は七夕つめもかくやあるらし

返し

たくひをき物とは我ろ成ぬへき七夕つめは人めやはもる

題不知

天川なかれて戀はどくもろあり哀と思ふせにはかくみん

玉かつら絶ぬ物からあら玉の年のわとりはたよ一夜のみ

秋は夜の心もしるく七夕のあへる今夜は明すもある赤ん

契けん言のはとはかへしてんどのしの渡りまよりぬる物を

なぬかの日に越後藏人につかはしける

あふことの今夜過なは七夕におどりやしなん戀はまさりて

藤原教忠朝臣

七日の日

七夕は天の戸渡りける夜さへをちかた人のつれをかかるらむ

讀人不知

七夕をよめる

天川とをき渡りはなけれども君かふなては年にころまで

銀河岩こす浪の立つ秋の七日のけふをこらまの
 けふよりや天のかつらはあせならんろこゐなくたゞ渡りかん
 天河流てどふる七夕のあみたなるらし秋のしら露
 天河せとの白浪高けれどたゝわたりきぬまつにくるしみ
 秋くれは川きり渡る天河かはかみみつゝこふる目のおほき
 天河こゑしき瀬にろ渡りぬる瀧津涙に袖はぬれつゝ
 七夕の年どはいはし天川雲立わたりいさみたれらん
 秋の夜のなかし別を七夕たてぬきにこら思ふへらるゝ
 七月八日はあしたに
 七夕のかへるあしたの天河舟はかまはぬなみもたゝあむ
 おなしころを
 あさ戸明てなかもやすらん七夕はあかぬ別れの雲を懸つゝ
 おもふ事侍て
 秋風のふけいさすかに侘しきはよのことばりと思ふ物から
 題不知
 まつ虫の初聲さうふ秋風は音羽山より吹ろめにけり
 ゆく盛雲の上までいぬへくは秋風吹どかりに告せ
 秋風の草葉うよきて吹なくには波のかにしつかをくらしのこゑ

きのともりの
 讀人不知
 凡河内躬恒
 兼輔朝臣
 貫之
 讀人不知
 業本朝臣
 讀人不知

ひぐらしの聲聞山の近けれや鳴つかさくに入日さすらん
 日晩の聲聞からに松虫のなよのみ人を思ふころ哉
 心ありて鳴もしつるか日晩のいつれも物のおきてうければ
 秋風の吹くるまひはさりくす草は根ことに聲みたれけり
 わかこと物や悲しきさりくす草のやどりに聲たゝすなく
 こむといひし程や過ぬる秋のくに誰松虫の聲の悲しき
 秋の野にさやとる人もれもはぬす誰を松虫こゝら鳴らん
 秋風のやや吹しけは野を寒み侘しき聲に松虫うなく
 秋くれは野もせに虫のをりみたる聲のあやを誰かさくらん
 風寒み鳴松虫の涙ころ草は色とる露と置らめ
 秋風の吹しく松は山なからなみを立かへる音うさこゆる
 是貞のみこの家歌合に
 松のねに風のしらべをまかせては立田姫ころ秋はひぐらし
 秋大輔かうつまさのかたはらなる家に侍け
 るにかきのはあふみをさしつかはしける
 山里の物さひしきは萩のはのさひくことこら思ふやらるゝ
 題しらす
 波には出ぬいかたかせまし花薄身を秋風に捨やはててん

つらゆき
 讀人不知
 藤原元善朝臣
 讀人不知
 壬生忠岑
 左大臣
 小野道風朝臣

ふたりの男にもひける女のひとりにつ
きにければいまひとりかいたかはしける
あけくらしまもる頼をかゝせつゝ袂はつ身とるありぬる

返し

讀人不知

心もておふる山田のひつちほはさみまもらねはかる人もなし

題不知

草はいどにぬく白玉とみぬつるは秋のむすへる露より有ける

後撰和歌集巻第六

藤原守文

秋歌中

延喜御時に秋歌めしありければたてまつりける

秋さりの立ぬる時はくらふ山おほつかなくろみぬはたりける

つらゆき

花みにと出にし物を秋ののさりにまよひてけふはくらしつ

寛平御時ささいの歌合に

浪近く立秋さりのもしはやく煙どのみちみぬはたりける

讀人不知

おなし御時の女郎花合に

ねりからにわか名は立ぬ女郎花いさねなくそ花くみにみん

秋の野の露にをらると女郎花拂ふ人あみぬれつとやふる

藤原興風

女郎花はなの心のあたされは秋にのみこころあひわたりけれ

讀人不知

はとれふくにできとに侍けるにせんでいの

後み玉へりける後返事に

五月雨にぬれぬし袖はいとくしく露をさうふる秋の侘しさ

近衛更衣

後返し

おは方も秋は侘しき時あれと露けかるらん袖をしうかもふ

延喜御製

亭子院は御前の花のいとれもしろくさき露

のをはるをめしてみせさせ給て

白露のかはるもなにかかしからんありての後もやうき物を

法皇御製寛平

御返し

うへたてゝ君かじめゆふ花なれば玉とみぬてや露もをくらん

いせ

太輔か後涼殿に侍けるに藤つはより女郎花

をれりてつかはしける

かりてみる袖さへぬるゝ女郎花露けき物とをやしるらん

右大臣九條

返し

様とにかしらん露を女郎花おに思ふとがまたきぬらん

大輔

又

をさあかす露のよなくへにければまたきぬか共思はざりけり

右大臣

返し

今は、や打とけぬへき白露の心をく迄よをやへよける
あひしりて侍ける女のおたなたちて侍けれ
は久しくとふらはさりけり八月はかりに女
のふとよりなとかいとつれなきといひをこ
せて侍ければ

大 輔

白露のうへはつれなくれさむの、萩の下はの色をこらみれ
返し

讀 人 不 知

心なき身は草はにもあらずに秋くる風にうたかはるらん
おどこのもとにつかはしける
人はいさことを共なき詠にう我は露けき秋もしらるゝ

い せ

人のもとにはおはさのいとたかきをつかとし
たりければ返事にしのふ草をくはへて
花薄はみ出ることもなきやとは昔しのふの草をこらみれ
返し

中 宮 宣 旨

宿もせにうへなぬつゝぞ我は見るまぬくか花に人やこまつと
たいしらす

い せ

秋のよを徒ふのみおさわかす露は我身れうへにう有ける
おはかたにをく白露も今よりは心してこらみ人かりけれ

讀 人 不 知

露さらぬ我身と思へど秋の夜をかくこらわかせおさぬなからに

右 大 臣

あきのころはをある所に女どものあまたす

のうちに侍けるにおどこのうたのをもとをい

ひ入て侍ければすゑへうちより

白露のおくにおまたの聲すれば花のいろくありとしらるん

よみひとしらす

八月あかの十日斗ふ雨のうは降ける日をみ

あへしほりに藤原のもろたをのへにいた

してをうくかへりければつかはしける

暮とては月もまつへし女郎花あめやめくとはおもはさらなん

左 大 臣

たいしらす

秋の田のかりはの庵の匂ふ迄さける秋はきみれどありぬかも

秋のよをまどろますのみ明す身は夢ちとたにも頼まさりけり

はかさの花をわたりて人につかはすどて

時雨ふりくおは人にみせもあへすちりおは惜みおれる秋はき

あきのうたどて行かへり

行かへり折でかさむ朝なく麻立おらす野への秋萩

我宿の庭の秋萩ちりぬめりのちみん人やくやしと思はん

白露のをかまくおしき秋はきを拵てや更に我やかさらん

つ ち ぢ

宗 干 朝 臣

よみひとしらす

どしのつもりにける事をかれこれすけるつ
るてに
秋萩の色つく秋を徒におまたかろへて花うしにける

貫之

たいしらす

秋の田のかりはの庵のどまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ
我袖に露ををるる天川雲のしがらみおみやこすらん

天智天皇
読人不知

秋萩の枝もどをくになり行こ白露をもくをけはなりけり
我宿のお花かうへの白露をけたすて玉にぬく物にもか

延喜時うためしければ

貫之

さを鹿の立ならずをのい秋萩にをける白露我もけぬへし
秋の野の草はいとよみぬなくにをく白露を玉とぬくらん

文屋朝康

白露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉うちりける
秋の野にをく白露をけさみれば玉やしけるをどろかれつゝ

題しらす

読人不知

をくからに干草の色になる物を白露とのみ人のいふらん
白玉の秋のこのはにやとれるとみゆるは露のはかる世けり
秋の野にをく白露の消さらは玉にぬきてもかけてみでまし
から衣袖くつる道をく露は我身を秋の野とやみるらん

大空に我袖ひとつあらずに悲しく露やわきて置らん
朝とにをく露袖にうけたためてよのうき時の涙にうかる

あきのうたどてよめる

貫之

秋の野の草もわけぬを我袖の物思ふあへに露けかるらん
いくよへて後か忘んちりぬへき野への秋萩みかく月よを
秋の夜の月の影ころこのまより落は衣と身にうつりけれ
袖にうつる月の光は秋とにこよひかはらぬ影とみへつる

読人不知

秋の夜は月にかさある雲晴て光さやかにみるよしもかな
秋の池の月のうへこく舟なればかつらの枝にさはやさはらん

小野華村

秋のうみにうつれる月を立かへりなみはあらへと色もかはらす
惟貞の淳子の家の歌合に

ふかやふ

秋の夜の月の光は清けれと人の心のくまはてらす
秋の月のねにかくてる物おらはやみにふる身はましらさまし

読人不知

八月十五夜

いつとても月みぬ秋はなき物をわきて今夜のめつらしき哉
月影はおもむ光の秋の夜をわきてみゆるは心なりけり

藤原惟正
読人不知

月を見て

空とをみ秋やよくらん久方の月はかつらの色もかはらぬ

紀津望朝臣

衣手は寒くもあらねど月影をたまらぬ秋は雪どころみれ

天川しからみかけてとよめなむあかすなかる月やよとむと

秋風に浪や立らん天河わたるせもなく月のなかる

秋くれば思ふ心ろみたれつまつもみちはとちりまさりけり

消かへり物思ふ秋の衣ころ涙の川のもみちなりけれ

吹風にふかき頼みのむをしくは秋の心をあさしと思はん

これさたのみこの家の歌合のうた

秋のよは人をしつめてつれくどかきあすことの音にう鳴ぬる

露をよめる

ぬきとむる秋しおければ白露の千種にをける玉もかひなし

八月十五夜

秋風にいとく更行月影を立なかくしうあまの川霧

延喜時秋歌めしありければ奉ける

女郎花にはへる秋の武藏野は常よりも猶むつましき哉

人よつかはしける

秋霧のはるくは嬉し女郎花立よる人やあらんどおへは

題しらす

女郎花草むらとにむれたつは誰松虫のこゑに迷う

貫 人 不 知 之

ふ 加 や ふ
よ み ひ と し ら す

藤 原 清 正

貫 之

兼 覽 王

讀 人 し ら す

をみなへしひるみてまじを秋のよの月の光を雲かくれつ

女郎花花の盛に秋風のふく夕くれを誰にかたらん

白妙の衣かたしき女郎花さける野へにうとよひねにける

なにしおへはしむて頼まむをみあへし花の心の秋はうくとも

七夕にいたる物哉女郎花秋より外にあふときもなし

秋の野によるもやねあんをみあへし花のあをのみ思ひかけつ

をみあへし色にもあるかな松虫をともによとして誰を待らん

前裁のをみあへし侍ける所にて

をみるへし句ふさかりをみる時ろわかかひらくは悔しかりける

すまひのかへりあるしのくれつかた女花郎

をありてあつよしのみこのかさしにさすと

て

女郎花はなのちいらぬ物ならはなにかは君かかさしにもせん

後撰和歌集卷第七

秋歌下

題不知

藤はかまさる人あみや立なから時雨の雨にぬらしろめつる

秋風にあをとしあへは花薄いつれ共なくはにう出ける

貫 之

み つ ね

讀 人 不 知

三 條 右 大 臣

讀 人 不 知

寛平修時ささの宮の歌合に
花薄ろよ共すれば秋風の吹かどろ聞獨ぬるよは

たいしらす

在原 棟 梁

はる薄はに出やすき草おれは身にならむとは頼れなくに
秋風にさるはれわたる鷹金は雲井はるかにけふるさこゆる

よみひとしらす

こしのかたに思ふ人侍ける時に
秋の夜にかりかも鳴て渡る之我思ふ人のことつてやせし

貫 之

たいしらす

秋風にきりとを分てくるかりの千世にかはらぬ聲聞ゆ也
物思ふと月日の行もしらすりつ鷹こる鳴て秋を告つれ

讀 人 不 知

やまどにまかりけるつゝてに

鷹金の鳴つるなへにから衣立田の山はもみちしにけり

題しらす

秋風にさるはれ渡るかり金は物思ふ人のやとをよはおん
たれきけと鳴鷹金る我宿のお花か末を過かてにして

行歸りこもかしこも旅おれやくる秋をにかりくしと鳴

秋とふくれと歸れば頼まぬを聲にたてつゝかりどのみなく

ひたすらにわかおもはなくにをのれさへかりどのみ鳴わたるらん

人のかりはきにけるとすをさして
年とに關路まどはぬ鷹金と心のかゝや秋をしるらん

み つ ね

やまどにまかりける時こそかれともにて

天川かりとどわたるさ波山のこするはむへも色つきにけり

まみひとしらす

兼輔朝臣左近少將に侍ける時むさしの傍馬

むかへにまかり立日俄にさるをありてか

はりにねおしつかさの少將にてむかへにま

かりてあふさかより隨身を返していひをく

り侍ける

秋霧の立野の駒を引時は心にのりて君ろ戀しき

藤厚 忠房 朝臣

題しらす

いろの神ふかのし草も秋は猶色とにころあらたまりけれ

在 原 元 方

秋の野のにしきこともみゆる哉色なき露はうめしと思ふ

よみひとしらす

あきのしにいかる露のをきつめはちの草はの色かはるらん

いつれをかわきて忍はん秋の野にうつるはんとて色かはる草

隠すて鳴ろしぬへき秋霧に友まどはせる鹿にはあらねど

たれきけも聲高砂にさをしかのふかしくしよを獨鳴らん

きのとも のり

打はへてかけどろ頼む峰の松色とる秋の風にうつるな

よみひとしらす

初時雨ふれば山へうおほほゆるいつれのかたかまつもみつらん
いもかきもどくとむすふと立田山今う紅葉の錦をりける
かり鳴て寒きあしたの露ならし立田の山をもみたす物は
みるまに秋にもあらず立田姫紅葉うむとや山もさるらん
梓弓入さの山は秋さりのあたるとにや色まさるらん

源宗千朝臣

客と我いもせの山も秋くれは色かはりぬる物にう有ける

讀人不知

をろくとも色つく山の紅葉はをくれさきたつ露や置らん

元方

かくばかりもみのる色のこければや錦立田の山といふらん

成則

から衣立田の山の紅葉とも物思ふ人の袂ありけり

讀人不知

足曳の山の山ももる山も紅葉せさする秋はきにけり

貫之

から衣立田の山の紅葉はくはた物もなき錦なりあり

貫之

人々もろとせにはまむらをまがり通に山の

もみちをこれかれよみ侍けるに

いく木共はころみはかね秋山の紅葉の錦よふたければ

題しらす

忠人

秋風の打吹からに山も野もあへて錦にをりかへすかな

よみひとしらす

あどさらは秋かとはんから錦立田の山のもみちするよを

あたなりと我はみあくに紅葉はを色のかはれる秋しあければ

玉かつらかつらき山の紅葉はは面影にのみみえ渡る哉

貫之

秋露の立しかくせは紅葉ははつあはつかあくてちりぬへらこ

かみ山をこゆとて

鏡山やまかきくもりしぐるれと紅葉あかく秋はみぬける

ろせい法師

となりすみ侍ける時九月八日いせか家の

さくにはたをさせにつかはしたりければ又

のあしたありてかへすとて

敷しらす君かよはひをのはへつゝなたる宿の露とならあん

いせ

返し

露たにもあたる宿の菊ならは花のあるしやいへよなるらん

藤原雅正

なか月のこいぬか鶴のなくありにければ

菊は上にをさるへくはあらくに千とせの身をも露にあす哉

いせ

きくの花なか月とに咲くれば久しき心あきやしるらん

よみ人しらす

なにしおはいは長月とに君か爲かきねの菊は句へどう思

はかたきくをうつしうへて
ふる里を別てさけり菊の花たひみからころ乞ふへらちれ
かにかさく色染かくし句ふらん花もてはやす君もこなくに

紅葉はの散くるみれば長月の有明の月のかつらなるらし

題しらす

いくちはたをればつ秋の山とどに風ふみたる錦なるらん
なをさりに秋の山へをこねくればをらぬ錦をきぬ人うなき
紅葉はを分つゆけは錦きて家にかへると人やみるらん
打むれていさわきもこか鏡山こねて紅葉のちるらん影へ
山風のふきのまに紅葉はこのもかのもに散ぬへら也
秋の夜に雨とさこねて降るは風にみたる紅葉也けり
立よりてみるへき人のわれはこころ秋の林に錦しくらめ

貫人不知之

木のもとにをらぬ錦のつもれるは雲の林の紅葉也けり

秋風にちる紅葉はは女郎花宿にをりしく錦也けり

芦曳の山のもみちは散ふけり嵐のささにみてまし物を

紅葉はの降しく秋の山へころ立て悔しき錦也けり

立田川色紅に成りにけり山の紅葉う今は散らし

龍田川秋にしるれば山ちかみながる水も紅葉しにける

紅葉散れ流るる秋は河とせに錦あらふと人や見るらん

龍田川秋は水あくあせあらんわかぬ紅葉の流るればかし

浪立てみるよしもかなわつみのうこのみつめも紅葉散やと

木の葉ちるとにちみたつ秋かれは紅葉に花も咲まかひけり

わたつみの神にたむくる山姫のぬさをう人は紅葉といをける

日くらしの聲もほどなくきこゆるは秋夕暮になれは也けり

風のをどの限と秋やせめつらん吹くることに聲の侘しき

貫人しらす之
貫人不知之
文屋朝康
藤原興風
貫人不知之
右
近

我こそく物思ひけらし白露のよを徒にねきあかしつゝ

讀 人 不 知

あひしりて侍りける人のち〜までこそ成
にければ男のれやき〜てをまかりと〜と
すをしふとさ〜て後にまできたりければ

秋ふかみよろにのみ間白露のたかまのはにかゝるあるらん

平伊望朝臣女

かれにけるおとこのあきとへりけるに

むしは承香慶は

とふとの秋しも稀にきてゆるはかわにや我を人のたのめし
もみちいといろこさなら〜とを女れも〜につ
かはして

源 冬 もの ぶ

君こふる涙あぬるゝ我袖と秋の紅葉といつれまさねと

題しらす

てる月れ秋しもことになやけさばちる紅葉はをよるもみよとか

よみ人しらす

故宮の内侍に兼輔朝臣忍てかよはし侍ける

ふみをとりてかきつけて内侍につかはしけ
る

など我身下は紅葉となりけんおなし歎の枝にころあれ

秋やみなる夜かれこれ物語し侍あひて厂の

あきはたり侍ければ

あるからはみるへき物をかりかねのいつこはかりに鳴て行覽

源 わ た す

徒に露にをかるゝ花かどて心もしらぬ人や折けん

讀 人 不 知

身のなりいてぬ事をと歎き侍るころ紀友則

かもとよりいかにろと思ををこせて侍けれ

は返事に菊の花をねりてつかはしける

藤 原 忠 行

接もはもうつろふ秋れ花みればはてと陰さくなりぬへらなり
返し

しつゝとてよはをのふてふ花なれば千代の秋にろ陰はしけらん

冬 冬 の り

延喜時秋歌めしありければ奉けり

秋の月光さやけみ紅葉はのかつる陰さへ見えわたる哉

貫 之

たいしらす

秋毎につらをはされぬ鴈金は春かへるともかはらさらなん

讀 人 不 知

男の花かつらゆはんとて菊のありしを聞所

にこひにつかはしたりければ花に加へてつ

かはしける

みな人におくれにけりと菊の花君か爲にろ露は置ける

たいしらす

吹風にまかすか舟や秋のよの月のうへよりけふはこくらん

もみちのちりつもれる木のもとにて

紅葉ばはちる木のもとにとまりけり過行秋やいつちあるらん

忘れにけるおとこのもみちをかりてをくり

て侍ければ

思出てとふにはあらし秋はつる色の恨みをみするある覽

長月のつこもりは日紅葉にををおを付てをこ

せて侍ければ

宇治山の紅葉をみすは長月の過行日をもしらするあらまし

九月つこもりに

長月の有明の月は有なからはかなく秋は過ぬへらん

あなしつこもりに

何方によは成ぬらんねはつかかな明ぬ限は秋ろと思はん

後撰和歌集卷第八

冬歌

題不知

初時雨ふれば山へろおもはゆるいつれのかたかまつもみつらん

はつしくれふるはほもななくさほ山のことるあまねくうつろひにけり

讀人不知

つらゆき

ちかぬかむすめ

神無月降みふらすみ定なき時雨う冬の初をりける

冬くれはさほの河せにわかたつも獨ねかたき音をう鳴なる

獨ぬる人のきかくも神無月にはかにもふる初しくれ哉

秋はてし時雨降ぬる我かれはちるをのほをなにかうらみん

吹風は色も見ぬね冬くれは獨ぬるよの身にうしみける

秋はてし我身時雨に降ぬればとのはさへにうつろひにけり

神無月時雨ばかりはふらすしてゆきかてにさへあどかなるらん

神無月時雨とにも神なひの柱の木のはふりにころふれ

女につかはしける

頼む木もかれはてぬれば神無月時雨にれみもぬるゝ比哉

山へいるとて

神無月時雨斗を身にうへてしらぬ山ちに入ろ悲しき

十月斗に大江千古かもこあはんとてまか

りたりけれとも侍らぬ程されは歸まてきて

尋てつかはしける

紅葉ばは惜き錦とみしかとも時雨とにもに降てころし

返し

紅葉ばも時雨もつらし稀ふきて歸らん人をふりやとゝぬぬ

増基法師

藤原忠房朝臣

大江千古

題不知

神無月限ごや思ふ紅葉はのやむ時もさくよるさへにふる
ちはやふぬ神垣山の柳ははしくれに色もかはらざりけり
すまぬ家にまてきて紅葉にかきていひつか
はしける

讀人不知

人すますあれたる宿をきてみれば今う木葉は錦かりける
返し

枇杷左大臣

涙さへ時雨にうひてふる里は紅葉の色はくさまざりけり
題不知

いせ

冬の池れかものうはけにをく霜の消て物思ふ比にも有哉
おやのはかあまかりてをろくかへりければ
つかはしける

讀人不知

神無月時雨降にもくる、日を君まつ程はなかしどぞ思
たいしらす

人の娘のやつ
になりける

身をわけて霜や置らんあた人の言のはさへにかれも行哉
冬の日むさしにつかはしける

人しれす君につけてし我袖のけさしもとけす氷るあるへし
たいしらす

かきくらしあられ降しけ白玉をしける庭共人のみるへく
神無月しくる、時ろみよしの、山のみゆきも降初ける
今朝の嵐寒くも有哉足引の山かき曇り雪ろふるらし
黒髪のをろく成行身にしわれはまつ初雪を哀どろみる
霞ふるみ山の里の侘しきはきてたはやすく問人ろるさ
ちはやふる神無月こそ悲しけれ我身時雨に降ぬと思へば
式部卿敦實のみこそ忍てかよふ所侍りける
をのちく、たらくになり侍ければいもふと
の前齋宮のみこのもとよりこのころといか
にろとわりければろの返事あ

しら山に雪よりぬれば跡絶て今はこしちに人もかよはず

女

雪の朝老をなけきて

降初て友まつ雪はむば玉の我黒髪のかはるなりけり

貫之

返し

黒髪は色ふりかふる白雪のまち出る友はうとくろ有ける

兼輔朝臣

又

くろ髪と雪との中のうきみればともか、みをもつらしとろあもふ

つらゆさ

返し

年とにしらかの敷をます鏡みるに雪の丈はしりける

兼輔朝臣

としふれど色もかはらぬ松か元にかゝれる雪を花どころみれ

よみひとしらす

霜かれの枝とな侘る白雪の消ぬ限は花どころみれ

氷ころ今はすらしもみよしの山の瀧つせ聲も聞ぬす

よを寒みね覺て聞はをしる鳴はらひもあへす霜や置らん

かつきぬて空もみたる淡雪は物思ふ人の心なりけり

藤原のふもと

師氏朝臣のかりして家のまへよりすかりけるをきいて

白雪の降はへてこそとはさらめどくるたよりをすてさらはま

讀人不知

題しらす

思ひつゝねなくに明る冬のよの袖の氷は舞すもあるか

あら玉の年をわたりてあるか上に降つむ雪の絶ぬ白山

まこもかる堀江にうきてぬる鴨の今夜の霜にいかにもふらん

白雲のかりある山とみぬつるは降つむ雪の消ぬかりけり

ふる里に雪は花と降つむる詠る我もおもひ消つゝ

流行水氷ぬる冬さへや猶浮草のあどはどいぬ

心あてにみはころわかめ白雪の何れか花の散にたかへる

天川冬は氷にとちたれや石まにたきつ音たにもせぬ

をしちへて雪のふれと我宿の杉を尋てとふ人もなし

冬は池の水に流てあし鴨のうきねなからにいくよへぬらん

山近みゆつらしけなく降雪の白くやあらん年積まは

松のはにかゝれる雪のうれを社冬の花とはいふへかりけれ

降雪は消てもしとしとましあん花も紅葉も枝にあき此

涙川身まぐばかりは淵はあれと氷舞ねは行方もなし

降雪に物思ふ我身おどちめやつもりくて消ぬばかりろ

よるかくは月とらみまし我宿の庭白妙に降積る雪

梅か枝に降をける雪を春近みめのうちつけに花かどろみる

いつしかと山の櫻も有とく年のこなたに春を待らん

年ふかく降つむ雪をみる時ろこしの白根にすむ心ちする

とし暮て春明かたに成ぬれば花のためしにまかふ白雪

春近く降白雪は小倉山降にろ花の盛なりける

冬の池にすむにはどりのつれもあく下にかよはん人にしらす

むは玉のよるのみふれる白雪は照月影のつるもる也けり

この月のどしの餘にたゝさらは鶯はしや鳴ろしあまし

關この道とばあしにちかなからどしにさばりて春を待哉
みくしをとのし別當に年をへていひはたり
侍けるをえあはすしてろの年のしはすのつ
こもりの日つかはしける

物思ふと過る月日もしらぬまふ今年はけふにはてぬとるきく

後撰和歌集卷第九

戀歌一

からふじてあひしりて侍ける人につらきこ
とありて又あひかたく侍ければ

京路のさやの中山をかへにあひみて後を侘しかりける

忍をたりける人に物かたりし侍ける人のさ
はかしく侍ければまかりかへりてつかはし
ける

源宗于朝臣

曉と何かいひけんわかるればよひもいとこそ侘しかりけれ

源ればきかかよひ侍けるを後へはまから
すあり侍にければとなりのかへのあまより
おほきをはつかにみてつかはしける

實之

まどろまぬかへにも人をみつる哉まさしからん春のよの夢

するか

あひしりて侍ける人のもとに返事みんとて
つかはしける

くや〜とまつ夕暮といまはとてかへるあしたといつれまされる

元良みこ

返し

夕暮は愁にもかゝるしら露のをくるあしたや消ははつらん

藤原かつみ

やまどにあひしりて侍ける人の許につかは
しける

打かへし君を戀しき山とあるふるの早田の思ひ出つゝ

讀人不知

かへし

秋の田のいねてふことをかけしかは思ひ出るか嬉しけもなし

女につかはしける

人こふる心ばかりはそれから我はわれにもあらぬなりけり

まかる所しらせす侍けるころ又あひしりて
侍けるおどこのもとより日頃たつね侘てう

思ひ川絶す流る水の淡のうたかた人にあはて消めや

題しらす

思ひやる心はつねにかよへどもあふ坂の關こゑすも有哉

三腕公忠

女につかはしける

きぬはてや、みぬはかりか年をへて君を思ひのしるしをければ

讀人しらす

返し

思ひたにしるしをしてふ我身にそあはぬ歎の數はもたける

題しらす

ほしかてにぬれぬへき哉から衣かはく袂のよゝになければ
よどいもよふ隈川の遠ければそなる影をみぬそ悲しき
我ごとくあひ思ふ人のなき時は深き心もかひをかかりけり
いつしかどわか松山に今はとてこゆるるなみにぬる、袖哉

女のもとにつかはしける

人ことはまことありけり下ひものどけぬにしるき心と思へば
結ひ置し我下ひものを迄にとけぬは人のこひぬかりけり

女の人のもとにつかはしける

ほかのせはふかくあるらし飛鳥川昨日の淵う我身なりける

返し

淵せ共いさや白波立さはく我身ひとつはよるかたもなし

題しらす

光まつ露に心を置ける身と消かへりつゝみをそうらむる

ある所にあふみといひける人のもとにつか

はしける

しほみたぬらみどきけはやよどもにみるめなくして年のへぬらん 貫

之

あつよしのみてまうてきたりけれどあはす

してかへして又のあしたにつかはしける

から衣きてかへりにしさよすから哀と思ふを恨むらんはた

桂のみこ

あを侍ける人の久しうせうこそなかりけれ

つかはしける

影たにもみぬすなり行山の井はあさきより又水や絶にし

きのめれど

返し

あさしてふ事をゆゑしみ山の井はほりしにこりよ影はみぬぬ

平定文

たいしらす

いくたひかいく田のうらに立かへる浪に我身を打ぬらすらむ

よみひとしらす

返し

立かへりぬれてはひぬるしほなれはいく田の海のさかどこそみて

女のもとに

逢事はいと、雲井の大空に立名のみしてやみぬ斗か

返し

よそなからやまむ共せず逢事は今こそ雲のたぬまふるらん

又おとこ

いまのみと頼むあれとも白雲の絶すはいつかあらんとすらん

返し

をやみせず雨さへふれば澤水のまさるらん共おもほゆる哉

たいしらす

夢にたに見る事をさき年をへて心のどかにぬるよなければ

みそめすてあらまし物をから衣たつなのみしてきるよさき哉

女のもとにつかはしける

かれはつる花の心はつらからて時過にける身をそうちむる

返し

あたにこそ散とみるらめ君にみならうつろひにたる花の心を

そのほとにかへりこんどてもものにまかりけ

る人のほとをすくしてこそりければつかは

しける

こんどいひし月日を過すをはすての山のはつらき物にそ有ける

返し

月日をもかそへけるかな君こよる数をもしらぬ我身ありけり

女にとしをへて心さし有よしをのたまひわ

たりける女なをことしをたにまちくらせど

たのめけるをその年も暮て明る春迄いとつ

ねなく侍ければ

このめはる春の山田を打かへし思ひやみにし人を戀しき

こころさし有さからぬあはす侍りける女の

もとにつかはしける

ころをへてあひみぬ時は白玉の涙も春は色まさりけり

返し

人こふる涙は春をぬるみけるたぬぬ思ひのわかすなるへし

おどこのこしかしこにかよふすむ所おほく

てつねにしもとはさりければ女も又色この

みなる名たちけるをうらみはべりける返事

に

つらし共いかへ恨ん鵬わかやと近くかくこねはせて

かへし

里ことに鳴こそわたれ時鳥すみかさためぬ君たつねとて

なかたかるへき女を思ひかけてつかはしけ

贈太政大臣

いせ

源九のむかひすめ

あつよしのみこ

數ちらぬみ山かくれの郭公人しれぬねを鳴つゝそふる
いと忍ひたる女にあひかたらひてのち人め

春道のつらき

おふ事のかたいとそとは知なから玉のをはかりなによりけん

これたゞのみこ

せて侍ければ

よみひとしらす

思ふとはいふ物からにどもすれば忘るゝ草の花にやはあらぬ
かへし

うへてみる我に忘てあた人にまつ忘らるゝ花にろ有ける

たいふのこといふ人

平定文か許よりなにはのかたへあんまかる
といひをくりて侍りければ

浦わかすみつめかるてふあまの身はまにか難波のかたへしもゆく
返し

大 さ

君を思ふ深さくらへにつの國のほりぬみに行我にやはありぬ

定 文

いかてかく心ひとつをふたしへにうくもつらくもあしてみすらん
たいしらす

伊 勢

どもすれば玉にくらへします鏡人のたからどみるうかあしき

讀 人 不 知

いはせ山谷の下水打忍ひ人のみぬまはあかれてうふる
しひたる人につかはしけり

人をあひしりて後久しくせううこもつかは
さしりければ

嬉しけに君かたのめし言のまゝかたみにくめる水にろ有ける
題不知

行やらぬ夢ちあまどふ袂には天津空ある露う置ける

身はやくちちの都と成にしを悲しきとの又もふりぬる

住吉の岸の白浪よあゝはあまのよろめみみるうかなしき

君こふとぬれにし袖のかはらぬは思ひの外にあれそけり

あはさりし時いかなりし物とてかたゝとのまもみねは戀しき

世中に忍ふか戀れ他しきはあひての後のあそぬありけり

戀をのみつねにするかの山をればふしのねにのみちらぬ日はなし

君により我身うつらき玉だれのみすは戀しと思はましやは

おどこの初て女のもとにまかりてあしたに

雨のふるにかへりてつかはしける
今ろしるあらぬ別の曉はさみを戀ちよぬるゝ物とは

返し

よろに降雨とこそきけおほつかき何をか人の戀ちといふらん
つらかりけるおとこに
たたみいつる物とはみつゝさゝかにの糸を頼める心ほそさは
返し

打わたしなかき心はやつ橋のくもてに思ふ事は絶せし

思ふ人侍ける女に物のたうひけれとつれな

かりければつかはしける

思ふ人思はぬ人のおもふ人おもはさらんおもをしるへく

返し

こがらし杜の下草風はやみ人れ敷はおひろひにけり

おとこのこと女むかふるをみておやの家に

まかりかへるとて

別をは戀しき物とさししかどうしろやすくもおもほゆるかあ

たいしらす

なきたむる袂こはれると朝みれば心どけても君を思は

身を分てあらまほしくそおもほゆる人はくるしといひける物を

雲井にて人を戀しと思ふ哉我はあしへれたつからなくに

人につかはしける

あざちふのをのしのはら忍ふれとあまりてなとか人れ戀しき

雨やまぬ軒の玉水敷しらす戀しき事のみささる比哉

源ひとしの朝臣
兼 盛

心みしかきやうにさこゆる人ありといひけ

れは

いせの海にはへてもあまがたくなわのなかき心は我うさされる

よみをとしらす

人につかはしける

色も出て戀すてふなを立ぬへき涙にうむる袖のこければ

かくこふる物としりせばよるはをきて明れば消る露ならましを

あひもみす歎もろめすありし時思ふ事こそ身になかりしか

戀のことわりなき物はあかりけりかつむつれつゝかつそ戀しき

女のももにつかはしける

わたつ海に深き心のなかりせば何かは君を恨しもせん

水上に祈るかひなく涙川うきても人をよそにみる哉

返し

祈ける見お神さへうらちめしきけふより外に影のみへねば

大輔につかはしける

色深くろめし袂のいとしく涙にさへもこさまざる哉

右 大臣

たいしらす

見る時はことを共なくみぬ時はこと有かばに戀しきやなう

よみひとしらす

かどこのこんどてことりければ

山里の楨の板戸もさゝさりき頼めし人を侍しよひより

はしめて女のもとにつかはしける

ゆく方もなくせかれたる山水のいはまほしくもおもはゆる哉

女につかはしける

人のうへのことしいへはしらぬ哉君も戀するをりもこそあれ

かへし

つらからはかなし心につらからむつれなき人をこひんどもせず

女につかはしける

人しれす思ふ心はかほしまのちるとはあしにかけく比哉

かどこのもとあつかはしける

はかなくておなし心に成にしを思ふかとは思ふらんやう

返し

佐しさをあかし心と聞からに我身を捨て君うかなしき

源 中 信 務

まからすありにける女の人に名たちければ

つかはしける

さためかくわたに散ぬる花よりはとときはの松の色をやはみぬ

かへし

住吉の我身なりせばとしふ共松より外の色をみましや

よみひとしらす

かどこにつかはしける

現にもとかさき事のあやしきはねなくに夢のみゆるこけり

女のあはす待けるに

白浪のよき岸に立よりてねもみし物を住吉の春

かどこにつかはしける

なからへてあらぬ迄にも言ればの深さはいかにあはれなりけり

後撰和歌集卷第十

戀歌二

女のもとにはしめてつかはしける

人を見て思ふ思ふもある物を空にこふるはかきかりける

獨のみ思ふはくるしいかにしておなし心に人をあしへん

我心いつならひてかみぬ人を思ひやりつる戀しかるらん

またとしわかりける女につかはしける

葉をわかみはにころ出ぬ花薄したの心にむすはさくめや

人をいひはしむとて

藤原忠房朝臣
みふのたゝみね
きのとものり
源 中 正

足曳の山下しけくいふ葛のたはねてとふる我としらすや
かくれぬよ忍ひ侘ぬる我身識めてのかはつと成やしませし

兼 覽 王
忠 房 朝 臣

女のさうしによなく立よりつゝ物なとい
をてのち

あふくまのきりとはおしに終夜立わたりつゝよをもふる哉

藤 原 輔 文

ふみつかはせとも返事もせさりける女のも

とにつかはしける

あやしきもいとふにはゆる心哉いかにしてかは思ひやむへき

讀 人 不 知

くにもちかをとるせさりければつかはしけ

ともかくもいふまのはのみぬ哉いつくは露のかゝるところは

題しらす

本 院 右 京

侘人のそはつてふなる涙川かりたちてころぬれわたりけれ

敏 仲

返し

淵を共心もしらす涙川かりやたつへき袖のぬるゝに

大 輔

又

心みに猶かりたゝんおみな川うれしきせにもなかれあふやと

敏 仲

わさどにはあらてとさく物いふふれ侍け

る女の心にもあらて人にさうはれてまかり
にければどの物にかきつけてつかはしけ
る

藤原敦忠朝臣

かゝりける人の心をしらす露のをける物とも頼けるかな

あひしりて侍ける女を久しうとはす侍けれ

はいといたうなんわを侍と人のつけ侍けれ

は

鶯の雲井に侘てなく聲を春のさかどろ我はきゝつる

藤原顯忠朝臣

ふみかよはしける女のこと人にあをぬとさ

いてつかはしける

かくはかりつねなきよとは知悉から人をはるかにふに頼けん

平 時 望 朝 臣

おどこのことさりければつかはしける

我がどの二むら薄かりかはん君か手なれの駒もこぬ哉

小 町 か ぬ

題しらす

よをうみの涙と消ぬる身あしあれば恨るをう數なかりける

枇 杷 左 大 臣

かへし

はたつみと頼めしをもあせぬれば我ろ我身のうらこころらむる

い せ

人のもとにつかいしける

東路のさの、船橋かけてのみ思ひ渡るを知人のなき
ふしてぬる夢ちにたにもあはぬ身は猶あまましき現どう思ふ

源等朝臣

あまれ戸を明ぬくといををして空鳴しつる鳥の聲哉

紀長谷雄朝臣

終夜ぬれて侘つるから衣あふ坂山に道まどひして

讀人しらす

思へどもあやなしとのみいはるればよるの錦の心ちころすれ

女のもとにつかはしける

音にのみ聞てもくはの山よりも杉の敷をば我ろみぬにし

をのれを思ひへたてたる心ありといへる女
の返事につかはしける

難波かたかりつむあしのあふことこのひとへも君を我やへたつる

遠き所にまかりけるみちよりやむるなき事

兼輔朝臣

によりて京へ人つかはしけるつゝてにふみ
のはしにかきつけて侍ける

家ことや君もこふらん白鷺のおきてもねても袖うかはかぬ

あひしりて侍ける人のもとより久しくとは

讀人しらす

すしていかにそやまたいきたるやとたはふ
れて侍ければ

つらく共あらんとそ思ふよろにても人やけぬるときかまほしさに

人のもとにしはくまかりけれとあひかた

く侍ければ物にかきつけ侍ける

書ぬとてねに行へくもあらなくはたとなくもかへるまされり

在原業平朝臣

おとて侍女をいとせらにいはせ侍けるを女

いとわりあしといはせければ

わりなしといふこそうつし嬉しけれをろかからすとみぬぬと思へは 元良のみこ

女のもとより心さしのはとをなんぬしらぬ

といへりければ

我戀をしらんと思はいたこの浦に立らん浪は敷をかるへよ

藤原奥風

いひかはしける女のもとよりなをさりにいふ

はこそあめれといへりければ

色あらはうつるはかりも染てまし思ふ心をやはみせけり

貫之

物のたうひける女のもとに文つかはしたり

けるに心ちあしとて返事もせさりければ又

つかはしける

足曳の山井はすともふみかよふあををもみぬはくるしき物を

大江朝綱朝臣

おほつふねに物のたうひつかはしけるを更
にきいれさりければつかはしける

人かたはをそや我なのおしからん昔のつまと人にかたらん

元良のみこ

返し

人はいき我はなきなのおしければ昔も今もしらすをいはん

おほつふね
在原棟梁女

返事をさりける女のふみをからうしてゐて

あどみれば心なくさの濱千鳥今は聲ころきかまほしけれ

よみひとしらす

たなしどころにてみかはしなからぬあはさ

りける女に

河とみて渡らぬ中におかるいはて物思ふ涙なりけり

心さしわりける女につかはしける

あま雲に鳴行かりの音にのみきわたりつゝあふよしもかま

住の元のなみにはあられとことゝもに心を君にかせわたる哉

公頼朝臣
貫之

兵衛につかはしける

みぬほどに年のかはればあふとのいやはるゝどおもほゆる哉

讀人不知

まかり出て歩ふみつかはしたりければ

けふすきはしまし物を夢にてもいつこをばと君かとはまし

中將更衣伊衛女

歩返し

現にう思ふへかりける夢どのみまどひしほどやはるけかりけん

延喜抄製

たいしらす

なかれてはゆく方もあし涙川我身のうらやかきりあるらん

藤原ちかぬ

我戀のかすにしどねば白妙の濱の眞砂もつきぬへらこ

在原のむねやな

涙にも思ひの消る物ならはいとかくむねはこがささらまし

貫之

しるしなき思ひやなそとあしたつの音に鳴迄にあはづ侘しき

坂上是則

とし久しくかよはむ侍ける人につかはしけ

玉のをの絶てみしかき命もて年月なかき戀もする哉

貫之

たいしらす

我のみやもへてきへなむよとゝもに思ひもあらぬふしのねのと

平定文

返し

ふしのねのもぬわたる共いかげせんけちこそしらぬ水さらぬ身は

きのめれど

こゝろさせる女の家のあたりにまかりてい

ひられ侍ける

佗わたる我身は露をおなしくと君かかきぬの草にきぬさん

つらゆき

たいしらす

みるめかるなきさやいつこあふこきみ立よるかたもしらぬ我身は 在原元方

東宮になるといふとのもどに女どものい

をけるにわやの戸をさしてゐていりにけれ

は又のあしたにつかはしける

なるとよりさしいたされし舟よりも我ろよるへもなき心ちせし

たいしらす

高砂の峯の白雲かゝりける人の心をたのみけるかま 讀人しらす

長明のみこの母の更衣さどに侍りけるにつ

かはしける

よろにのみまつははかまき住のえのゆきてさへこそみまほしけれ 延喜御製

たいしらす

かけろふにみしはかりにや濱千鳥行衛もしらぬ戀にまどはん 等朝臣

ありどころはしりなからぬあふましかりけ

る人につかはしける

わたつみの底のありかはしりなからかつきていらん浪のまろさき 藤原兼茂朝臣

女のもどにつかはしける

つらし共思をそはてぬ涙川なかれて人をたのむ心は 福實利朝臣

かへし

流ても何頼むらん涙川影みゆへくもかもほむなくに 讀人不知

人をいむわつらひてつかはしける

何事を今は頼まむちはやふる神もたすけぬ我身也けり 平定文

かへし

千はやふる神もるこそおれぬらしさましく祈る年もへぬれば かほつふね

女のもどにまかりたりけるをたしにてかへし侍

ければいひいれ侍ける

恨ても身こそつらけれから衣きて徒に返すと思へば 貫之

あひしりて侍ける人を久しうとはすしてま

かりたりければ門より返しつかはしけるは

住の元の松に立よる白浪のかへるおりにやねはなるらん 壬生忠峰

おどこのもどよりいまはこと人あんおれば

といへりければ女にかはりて

思はんと頼めし事も有物をなき名を立てたしに忘れ よみをとしらす

返し

春日野の思ふひのもりみし物をなきまどいはしつみもころこれ

題しらす

忘れられて思ふ歎の茂るをや身をはつかしの杜といふらん

人の心かはりにければ

思はんと頼めし人はありとさくいとをしのはいつちいにけん

右 近

さたくにの朝臣のみあす所きよかけの朝臣

とみちのくにゝある所くをつくして歌に

よみかはして今はよむへき所なしといひければ

さても猶まかさは鳥のありければ立よりぬへくれりほゆる哉

源清蔭朝臣

こと女のふみをめのみんどいひけるにみせ

さりければ恨けるにそのふみのうらにかき

つけてつかはしける

これはかく恨み所なき物をうしをろめたくは思はざるらん

よみひとしらす

久しうあはさりける女につかはしける

思ひきやあひみぬ事をいつよりとかそふ斗にあさん物とは

源さねあきら

題しらす

よのつねの音をしるかねは逢事の涙の色もことにそ有ける

白浪のよする磯間をこく舟のちどりあへぬ戀もする哉

戀しさはねぬになくさむともさきにあやしくあはぬめをみる哉

としへていをはたり待ける女に

藤原治方
大伴黒主
源うかふ

久しくも戀渡る哉住のぬの岸に年ふる松ならなくに

題しらす

源すへか

逢事のよよをへたつかくれ竹のふしの數なき戀もする哉

藤原清正

かれかたになりける人にすゑもみちたる枝

につけてつかはしける

今はてふ心つくはの山みればこそより社色かはりけれ

讀人しらす

女のもよよりかへりて朝につかはしける

かへりけむ空もしくれすをばすての山より出し月をみしまに

源重光朝臣

兼輔朝臣にあひ初てつねにしもあはさりけ

おほどに

降舞ぬ君か雪けのしつくゆへ袂にとけぬ氷りしにけり

清正母

かたふたかりける頃たかへにすかるとて

片時もみねは戀しき君をさきてあやしやいく夜外にぬぬらん

藤原有文朝臣

題しらす

思ひやる心にたくふ身とさは一日に千度君はみてをし

大江千古

うくをくりて侍けるにすれるかりきぬ侍け

るに

逢事は遠山どりのかり衣きてはかひなき音をのみそなく

元良のみこ

題しらす

ふかくのみ思ふ心はあしのねの分ても人にあはんどろ思ふ

あつよしのみこ

いのひてあひわたりける人に

いさり火のよるはほのかにかくしつゝありへは戀のしたにけぬへし

藤原忠國

寛平のみを待つしおろさせたまうてのころ

渉帳のめぐりにのみ人はさふはせら給てち

かうもめしよせられさりけれと出て渉帳に

結ひ付ける

立よらはかけふむ斗近けれと誰かあそその關をすへけん

小八條淨息所

おどこのもどにつかはしける

我袖は赤にたつ末の松山か空より浪のこぬぬ日はあし

大左

月をわはれといふはいむちりといふ人のあ

りければ

獨ねの侘しきまゝにおきあつゝ月を哀といみそかねつる

讀人しらす

おどこのもどにつかはしける

から錦かしき我名は立てていかにせよとか今はつれなき

はしめて人にのたまひつかはしける

人つてにいふことのはの中よりと思ひつくはの山はみぬける

はつかに人を見てつかはしける

たよりにもあらぬ思ふのあやしきこ心を人につくるちりけり

貫之

人の家より物みにいつるくるまをみて心つ

きにおほぬ侍ければたそと尋とひければお

ける家のあるしと聞てつかはしける

人つまに心あやなくかけはしのあやうき物は戀おそ有ける

よみをとしらす

のもしはすして日暮ればおきもあからすと

きしてこの思ひかけたる女のもどよりなど

かくすきしくはといひて侍ければ

いはて思ふ心ありうの濱風に立しら浪のよるそわをしき

心かけて侍ければといをつかんかたもちくつ

れなきさまにみぬければつかはしける

獨れみこふれはくるしよふこ鳥聲に鳴出て君にきかせん

おどこの女にふみつかはしけるを返事もせ

てたぬにければ又つかはしける

ふしきくて君の絶にし白いとはよりつきかたき物にそ有ける

かどこのたをよりまてきていままんまてきて
つきたるといをて侍ける返事に

草枕こひのたへつるとし月のうきはかへりて嬉しからなん

かどこのほど久しうありてまてきて見心の

いとつらきに十二年の山こもりしてなん久

しうきこぬさうつるといひ入たりければよ

ひいれて物あといひて返しつかはしけるか

又をもせさうければ

出しよりみぬすなりにし月影は又山のはに入やしにけむ

返し

足曳の山におふてふもろかつら諸共にころいらまほしけれ

人をおもひかけてつかはしける

濱千鳥たのむをしれとふみそむる跡うちけつな我をこするみ

返し

ゆく水の瀬とにふせまん跡ゆへにたのむしるしをいつれとかみん

人のもとにはしめてふみつかはしたりける

ふ返事はなくてたゝかみをひき結て返した

りければ

平 定 文

おはつふね

つまにおふることをなし草をみるからに頼む心をかすまざりける 源もろあさらの朝臣

角てをこせて侍けれと宮仕する人なりけれ

は暇なくて又の朝に常夏の花に付てをこせ

て侍ける

玉露の懸る物とは思へともかれせぬ物はあてしこの花

かへし

かれす共いかゝ頼む撫子のはなは常磐の色にしあらねは

後撰和歌集巻第十一

戀歌三

女のもとにつかはしける

かにしればいあふ坂山のさねかつら人にしられてくるよしもかあ

三條右大臣

戀しとはさらあもいはししたをものどけんを人はうれとしらなん

在原元方

返し

したひものしるしとするも舞なくに語かことはあらずも有哉

讃人不知

女のいとおもひはあれていふにつかはしけ

る

現にもはかき事の花しきはねまくに夢とおもふにけり

みやつかへする女のあひかたく侍りけるに

たむけせぬ別する身の侘しきは人めをたひと思ふありけり

貫之

かりうめある所に侍ける女み心かはりにける男のこゝにてどかくをむなき所なれば心ざしはありなからむむね立よらぬといへりければ所をかへて侍けるにみぬさりければ花かへてまつにもみぬす成ぬればつらき所のおほくもある哉たいしらす

女

思はんとたのめし人はかはらしをどはれぬ我やあらぬなるらん

よみひとしらす

源さねあきらけたのむ事なくはしぬしと

徒にたひくしぬといふぬればあふには何をかへんとすらん

中務

返し

しぬくときくたにもあひみねは命をいつのよにか残さん

源信明

ときく見ぬける男のゐる所のさうしにとりのかたをかきつけて侍りければあたりををしつけ侍りける

るにかけける鳥ども人を見てしかるおなし所をつねにどふへく

本院侍従

大納言國經朝臣の家に侍ける女に平定文い

と忍でかたらひ侍てゆくすゑまであきら侍けるころこの女俄に贈太政大臣にむかへられてわたり侍にければふみたにもかまはずかたなくありにければかの女の子のいつはかりあるか本院のにしのたににありひありきけるをよひよせて母にみせ奉れどてかひなにかきつけ侍ける

平定文

むかしせし我兼言の悲しきとわかに契りし名残なるらん

よみひとしらす

返し

現にてたれ契りけんさため夢ちにまよふ我はわれかはれはやけつかひにて東のかたへまかりけるほどにむしめてあひしりて侍女にかくやむ事をき道なれば心にもあらすまかりぬる事と申てどたり侍りけるを後にあらためさためらるゝ事ありてめしかへされければこの女きよてよろこぶなからどかにつかはしたりければみちにて人の心ざしをくりて侍けるくれはどりといふあやをふたむらつゝみ

てつかはしける
くれば鳥わやに戀しく有しかはふたむら山もこゑすありにき

清原諸賢

返し
から衣たつせおしみし心ころふたむら山の關となりけ

よみひとしらす

人のもどにつかはしける

夢かとも思ふへけれとおほつかなねぬにみしかはわさうかねつる

きよふりか女

少將真忠かよひ侍ける所をさりてこと女に

つきてうれよりかすかの使に出たちてまかりければ

空しらぬ雨にもぬるゝ我身哉みかさの山をよろにきつゝ

もとの女

あさかほの花まへにありけるさうしよりか

もろともをさるともあしに打とけてみぬにけるか朝かほの花

内にまゐりてをさしうをどせさうける男に

もゝしきはをのゝくたす山おれや入にし人の音つれもせぬ

女のもどにきぬをぬきかきてとりにつかは

をんな

すきて

鈴鹿山いせどのあまのすて衣しはなれたりど人やみるらん

題しらす

いかて我人にもとはん曉のわかぬ別やなにゝにたりと

貫之

戀しきに消かへりつゝ朝露のけさはをさぬ心ちころせぬ

在原業平朝臣

しのゝめにあかて別し袂を露やわけしど人やどかむる

讀人しらす

戀しきも思ひこめつゝある物を人にしらるゝ涙なにけり

平中興

からうしてあへりける女につゝむ事侍てみ

ぬあはす侍ければつかはしける

あふさかの木の下露にぬれしよりわか衣ては今もかはかす

兼輔朝臣

題しらす

君を思ふ心を人にこゆるきのいろの玉もや今もからまし

みつね

おやある女に忍をてかよひけるをとおとこも

しはしは人にしられしといひ侍ければ

あき名ろと人にはいをて有ぬへし心のとばゝいかに云らん

讀人しらす

なきなたちけるころ

きよけれと玉ちらぬ身の佐しきはみかける物にいはぬえけり

いせ

しのひてすみ侍ける女につかはしける

あふ事をいさはに出なだしのすゝき忍ひはつゝき物ならまくに

敦忠朝臣

あひかたらひける人これもかれもつゝむ事

ありてはなれぬへく侍ければつかはしける

讀人しらす

あひみても別る事れあかりせばかつく物はおもはさらまし

閑院左大臣

いづのまに懸しかるらんから衣ぬれにし袖のひるまはかりに

貫之

別つるほどもへなくに白浪の立かへりてもみまほしきか

返し

女しれぬ身はいそげともしをへてなごこへかたきあふ坂の關

小野好古朝臣女

つれもおき人にまけしとせし程に我もあたまは立ましにける

かればかたに成おける男のもとはさううくて

うしてをくねりけるにかゝるからうき心

ちあんするといへりければ

つらからぬ中に有こううとしといへたてはてしきぬにやはあらぬ小野遠奥か娘

玉節の所にて閑院のおほいきみにつかしけ

る

どきはなる日影のかつらけふしころ心の色にふかくみぬけれ

もろまきの朝臣

返し

誰とあくかゝるればみにふかゝらん色をどきはにいかに頼まん

藤つはの人々月夜にありきけるを見てひと

りかもどあつかはしける

たれとあくかはるに見ゆし月影にわける心を思ひしらなん

左兵衛督師尹朝臣につかはしける

春をたにまたて鳴ぬる鶯はふるすはかりの心なりけり

たいしらす

夕されは我身のみこそをかきしけれいつれのかたに枕さためん

聲にたにまたみぬなくお懸しきはいつちならへる心なるらん

思ふてふ事をなねたくふるしける君にのみころいふへかりけれ

あな懸し行てやみましの國の今もありてふうらのはつしま

やんことあき事によりて遠き所にまかりて

たらん月ばかりにあむまかりかへるへきと

いひてまかりたりてみちよりつかはしけ

る

月かへて君を問んといひしかと日たにへたてす懸しき物を

ねなし所にみやつかへし侍てつねにみまら

貫之

しける女につかはしける

題しらす

いせのうみにしはやくあまの藤衣あるとはすれとあはぬこいかな

み っ ね
是 則

わたのうこかつきてしらん君か爲思ふ心のふかさくらへに

から衣かけて頼まぬ時ろあき人のつまどはおもふものから

右 近(季繩女)

人れもどにまかれりけるにすのどにすへて

物いひけるをすを引あけしはいたくさは
さければまかり歸りて亦のあしたにつかは
しける

あらかりしあみの心わつらけれとすみしによせし聲う戀しき

藤原守正(兼輔男)

あひしりて侍ける女の心ならぬやうにみぬ
侍りければつかはしける

いつかたに立かくれつゝみよとてか思ひくまなく人のなかゆく

藤原後蔭朝臣

おとこの心やうくかれかたにみぬ行けれ
は

つらさをもうさをもうよにみしかとも我身に近きよにころ有けれ

土 佐

女に心さしあるよしいをつかはしたりけれ
はよの中の人の心さためあければたのみか
たきよしをいひて侍けれ

淵は瀬になりかはるてふあすか川わたりみてころしるへかりけれ

在 原 元 方

題しらす

いとほるし身をうればしみいつしかとあすか川をも頼むへら也

い せ

飛鳥川せきてとらむる物あらは淵瀬にゐるとおにかいはせん

贈 太 政 太 臣

女四のみこにをくりける

あしたつの澤へに年はへぬれとも心は雲のうへののみころ

右 大 臣

返し

あしたつの雪井よかふる心あらはよをへて澤にすますあらし

せううこつかはしける女の又こそ人にふみ

つかはすとききて今は思ひたふねといひを

くりて侍りける返事に

松山につらさをからる浪こそん事はさすかに悲しき物を

贈 太 政 大 臣

みやつかへし侍ける女ほど久しくありて物

いはんといひ侍けるにをそくまかりければ

よひのまにはやなくさめよいろの神ふりにし床も打はらふべく

枇杷左大臣

わたつみとあれにし床を今更にはらはし袖やあはとうきなん

伊勢

心ざしありていをかはしける女のもどより

しほのまにあさりするあまもをのかよかひありとこそ思ふへらちれ長谷雄朝臣

贈太政大臣

あちきなくちどか松山浪こさむことをはさらに思ひはなる

伊勢

岸もなく鹽しみちち松山をしたにて浪はこさんとを思

まかりをきて侍ける男の心かはりければそ

これらの朝臣のむすめいまさ

よどいも歎きこりつむ身にしあはなをやまもり有かひのもなく

火の心つらく成にければ袖といふ人をつか

讀人しらす

ひにて

へしとさいて

山のはにかゝる思ひの絶おらは雲井なからも哀と思はん

藤原眞忠かいらもど

まちしりの君にふみつかはしたりける返事

なみつとれみありければつかはしける

源たのむ

なきあかす涙のいとろひぬればはかなきみつも袖ぬらしけり

もろうちの朝臣

夢のとはかなき物はなかりけりなにとて人にあふとみつらん

讀人しらす

こゝろさし侍ける女のつれなきに

讀人しらす

思ねのよなく夢にあふ事をたかた時のうつとどもかあ

讀人しらす

時のまのうつを忍ふ心ころはかなき夢にまごらさりけれ

讀人しらす

玉つ嶋ふかき入江をこく舟のうきたる戀も我はする哉

讀人しらす

つこの國のまにはたしましおしみころすくもたくひの下にこかるれ

讀人しらす

人のもどよまかりていれさりければすのこ

讀人しらす

みふしあかしてかへるとていひいれ侍ける

讀人しらす

夢ちにもやどかす人のあまませはね覺に露ははらはらまし

讀人しらす

紀内親王

讀人しらす

讀人しらす

讀人しらす

讀人しらす

讀人しらす

讀人しらす

讀人しらす

讀人しらす

讀人しらす

心ざしはありなからぬわはざりける人につ
かはしける

かへし

みるめかる方そあふみにあしとさく玉もをさへやあまはかつかぬ
なのみしてあふ事をみのしけきまにいつか玉もをあまはかつかん

心ざしありて人にいひかはし侍けるをつれ

あかりければいひわつらなてやみにけるを

思ひ出てしきりにいひわくくりける返事に心

ならぬさまなりといへりければ

かつらきやくめちの橋にあらはこそ思ふ心をか空にせめ

人のもどにつかはしける

かくれぬにすむをし鳥の聲絶すあけどかいなき物にて有ける

つうどのよみこにつかはしける

つくはねの壘よりあつるみちの川こひそつもりて淵を成ける

あひしりて侍りける人のまうてこそありて

のち心にもあらすこそをのみさくはかりに

て又音もせず侍ればつかはしける

かりか音の雲井はるかたさこぬしは今は限の聲にそ有ける

よみひとしらす

右大臣

陽成院製御

返し

今はとて行かへりぬる聲ならはあひ風にてもきこぬましやは

兼覽王

おどこのけしきやう／＼つらけにみぬければ

心からうきたる舟にのりうめてひとひも浪にぬれぬ日うなき

小町

おどこれ心つらく思はれにけるを女をさ

りにあどか音もせぬといひつかはしたりけ

れは

忍ふ心と思ふ心やすからはつれなき人を恨みましやと

よみひとしらす

よひに女にあをてかならすのちにあはんど

ちかことをたてさせてあしたにつかはしけ

る

ちはやふる神ひさかけてちかひでしこともゆふしくあらかふまる哉

院のやまどにあふきのかはすとて

思ひには我ころ入てまどはるれあやなく君やすししかるべき

右大臣

かねみちの朝臣かれかたになりてとしこぬ

てとふらきて侍ければ

あらずのとしもへぬる松山のあみれ心はいかもなるらん

元平のみこのむすめ

とどのめにかへりすむと聞てどこのもと

につかはしける

わかためはいとあさくや成ぬらん野中の清水ふかさまされは

読人不知

あふみちをしるへなくともみてしかき關のあみたはわひしかりける

源中正

道しらてやみやとしあぬあふ坂の關のこあたはらみへ云也

下野

女のもとにまかりたるにはやかへりねどの

つれなきを思ひ忍ふのさねかつらはてはぐるをもいとふなりけり

よみひとしらす

あつよしのみこの家おやまといふ人につかはしける

左大臣

今さらお思を出しと忍ふるを戀しきにこそ忘れ侘ぬれ

いひかはしける女のいまは思ひあすれね

長谷雄朝臣

我かためはみるかひもなし忘草わするはかりのこひにしわかねは

藤原有好

あひみてもつゝ思ひの侘しきは人まにのみろねはあかれける

忍ひてかこひける人に
かいはせんいさともいをはなちてこといひ
侍ければ

読人不知

小山田の苗代水はたてぬとも心のいけのいひはあたし

かたゝかへに人の家に人をくしてまつり
てかへりてつかはしける

千世へんと契り置てし姫松のねとしめてしやとて忘れし

物いおける女にせみのもぬけをつゝみてつかはすとて

源重光朝臣

花をみて人もすさめぬ戀すとて音を鳴虫のなれるすかたを

坂上これのり

あひみてはあたたむやとぞ思ひしに名残しもこそ戀しかりけれ

戀歌四

女のもとにつかはしける

わか戀のかすをかそへはあまの原くもりふたかりふる雨のよ

としゆきの朝臣

忘れにける女をおもひ出てつかはしける

打返しみまゝうほしき故郷のやまと撫子色やかはれる

よみひとしらす

山彦の聲にたてゝもどしはへぬわか物思ひをしらぬ人さけ

枇杷左大臣

身よりあまれる人をおもひかけてつかはしける

玉藻かるあまにはあらねどわたつみのうこるもしらす入心哉

きのともれり

返しも侍らざりければ又かさねてつかはしける

みるもなくめもあき海の磯に出てかへるくもうちみつる哉

あたに見ゆ侍けるおとこに

こりすまの浦の白浪立出てどる波ともさくかへるはかりか

證人不知

あひしりて侍る人のあふみのかたへまかりけきは

關こゝてあはつこの杜のあはす共清水に見ゆしかけを忘れお

返し

近ければなにかはしるしあふ坂の關の外うと思ひ絶なん

つらく成にけるおとこのもどにいまはどて

さうそくまど返しつかはすとて

いまはどてこすゑふかゝる空蟬のかりをみんとて思はざりしを

平なかきかむすめ

忘らるゝ身を空蟬のから衣かへすはつらき心ありけり

源 巨 城

ものいをけるおむさのかゝみをかりて返すとて

影ふたにみぬもやするとたのみつるかをさく戀をます鏡哉

證人しらす

おとこの物なといひつかはしける女のあさ

かの家にまかりてたゝきけれどもさゝつけ

すやありけんかともあけす成にければ田の

ほどりにかへるのなきけるをさゝて

足引の山田のうはつ打佗て獨かへるの音をを鳴ぬる

ふみつかはしける女のはゝの戀をしこまは

といへりけるかとしこるへにければつかは

しける

たねはあれどあふ事かたき岩の上は松にて年をふるはかひるし

女につかはしける

ひたすらにいとひはてぬる物さらは吉野の山にゆくゑしられし

贈太政大臣

返し

我やどゝ頼むよしのに君しいらはおなしかさしをさしころはせめ

い せ

題しらす

紅ふ袖をのみこそをめてけれ君をうらむる涙かゝりて

讀人しらす

これなくみぬける人につかはしける
紅に涙移るときはしをばなといつはりとわれおもひけん

返し

紅に涙しこくはみどりなるうても紅葉とみぬまし物を

相住ける人心にもあらて別にけるか年月を

へても相見んと思て侍けるみを見出てつか

はしける

いにしへの野中のし水みるからにさしくむ者は涙をりけり

おもふ事侍ておどこのもとにつかはしける

あま雲のはるる夜もなく降物は袖のみぬるゝ涙にけり

かたふたかりとてれどこのこさりければ

あふ事のかたふたかりて君こそすはおもふ心のかたふはゝりう

あをかたらをける人の久しうこさりければ

つかはしける

ときはにどたのめしとはまつほどの久しかるへきなにしろ有けれ

題不知

こさまさる涙の色もかひをさきみすへき人のこのよならねは

女のもとにつかはしける

住吉の岸にさまする沖津浪まなくかけてもおもはゆる哉

返し

住の江のめに近かりは岸にゐて浪の敷をよむへき物を

つらかりける人のもとにつかはしける

こひてへんと思ふ心のわりなさはしにてもしれよ忘れかたみに

返し

もしもやとあひみん事をたのますはかくする程にまつらけあまし

贈太政大臣

たいしらす

あふとたに形みにみゆる夢ならは忘るゝ程もあらまし物を

讀人不知

をどにのみ聲を聞哉足引の山下水にあらぬものから

秋さりの立たるつとめていとつらければこ

のたひはかりなんいふへきといひたりけれ

は

秋とてや今はかきりの立ぬらな思ひにあへぬ物ならなくに

伊

勢

心れうちに思ふ事やありけむ

見し夢の思を出らるゝよを事はいはぬをしるは涙なりけり

たいしらす

白露のおきてあひみぬ事よりはきぬ返しつゝねあんどる思

よみをとしらす

人のもどにつかはしける

言のはゝあけなる物といひなから思はぬためは君もしるらん

女のもどにつかはしける

白浪の打出るはまの濱千鳥跡やたむぬるしるへなるらん

朝忠朝臣

女につかはしける

おほしまに水を心懸しはや船のはやくも人よあひみてしかな

大江朝綱朝臣

伊勢なん人にやすられてなけき侍と聞てつ

かはしける

ひたふるに思をな侘るふるさるゝ人の心ころれろよのつね

贈太政大臣

返し

よのつねの人の心をまたみねはあにか此たをけぬへき物を

伊勢

淨藏くらまの山へあんにいるといへりければ

墨染のくらまの山に入人はたとあゝもかへりきあらん

平中興かむすめ

あひしりて侍ける人のまれにのみみぬけれ

は

日をへてもかけにみゆるは玉かつらつらさあからも絶ぬ也けり

伊勢

あざとにはあらず時々物いひ侍ける女はと

久しうとはす侍ければ

高砂の松を緑を見しこといしたの紅葉をしらぬけり

讀人不知

返し

時わかぬ松のみとりも限なき思ひには猶色やもゆらん

たふみかはすはかみにてとしへ侍ける人

につかはしける

水鳥のはかき跡に年をへてかよふはかりのぬにこそ有けれ

返し

浪の上に跡やはみゆる水鳥のうきてへぬらん年ばかりかすかは

せうろこつかはしける女のもどよりいそ舟

のといふ事を返事にいひ侍ければたのみて

いひわたりけるにををわひかたきけしきに

侍ければしはしとありしをいかされはかく

はといへりける返事につかはしける

あのをれよるせいの白浪あさければとまるといそ舟かへるあるへし

返し

最上川ふかきにもあへすいそ舟の心かろくもかへるあるかな

三條右大臣

いとしのひてかたらふ人のをろかあるさま

に見ゆければ

花薄はに出ることもなき物をまたき吹ぬる秋の風哉

よみひとしらす

心ざしをろかにみゆける人につかはしける

またさりし秋はきぬれとみし夫の心はよ所に成も行哉

ふかきがむすめ

返し

君を思ふ心なさは秋の夜にいつれまさと空にしらなん

源是茂朝臣

ある所にあふみといふ人をいと忍てかたら

ひ侍けるを夜あけてかへりけるを人みてさ

いやさければるの女のもとにつかはしける

鏡山あけてきつれば秋きりの今朝や立ちんあふみてふなほ

坂上つねかけ

あひしりて侍女の人にあたなたち侍けるに

つかはしける

枝もなく人におらるるをみなへしねをたにのこせうへしわかため

生まれよの朝臣

人のもとにまかりて侍よひいれぬはすの

こにふしあかしてつかはしける

秋の田のかりそめふしもしてけるかいたつらいねをなに、つまし 藤原成國

平かねきかやう、かれかたにちりにけれ

はつかはしける

中務

秋風の吹につけてもとはぬ哉萩のはならは音はしてまし

とし月をへてせううとし侍ける人につかは

しける

君みすていくよへぬらん年月のふるといもにもれつる涙か

讀人不知

女につかはしける

中へに思ひかけてはから衣身になれぬをうらむへらなる

返し

うらむ共かけてこそみめから衣身になれぬればふりぬどかきく

人につかはしける

なけいともかひあかりける世中になに、悔しく思をうめまん

わすれかたにあり侍けるおどこにつかとし

ける

こぬ人を松のぬにふる白雪のきぬこそかへれくゆる思に

承香殿中納言

わすれ侍にける女ふつかはしける

菊の花移る心をなくしもにかへりぬへくもおもはゆる哉

讀人しらす

返し

今はどて移りはてにしきくの花かへる色をは誰かみるへさ

人れむすめにいと忍ひてかよひ侍けるにけ

しきをみておやのまかりければ五月ある雨
の比つかはしける

詠してもりも侘ぬる人めかまいつか霧間のあらんとすらん

またおはす侍ける女のみどにしぬへしとい

へりければ返事にはやしねかしといへりけ

れはまたつかはしける

おなしくは名こそあらひの池にこそ身をまけつ其人にきかせぬ

女につかはしける

かけろらふの海のめきつれば夕暮の夢かどのみる身をたどりける

返し

ほの見てもめなれにけりと聞からにふし歸りころしなまほしけれ

せうろこしはくつかはしけるをちくはし

侍りてせいし侍ければぬあひ侍らて

あふみてふかたのしるへもねてしかなみるめあきこと行て恨ん

返し

あふさかの關とめらるゝ我なれば近江てふらんかたもしられす

女のもとにつかはしける

足引の山下水のこかくれて瀧津心をせきうかねつる

よしの朝臣

春澄善繩朝臣女

源よしの朝臣

返し

木かくれて瀧津山水いつれかはめにしもみゆる聲にころさけ

讀人不知

人のもとよりかへりてつかはしける

曉れあからましかはしら露のおきてわひしき別をましや

返し

かきて行人の心を白露は我ころまつは思ひきぬれ

よみひとしらす

女のもとにおことかへしつゝよをやつくま

へ高砂のといふをいひつかはしたりけれ

高砂の松といひつゝ年をへてかはらぬ色どきかは頼まん

人のむすめのもとに忍ひつゝかよひ侍ける

をおやきいつけていといたくいひければか

へりてつかはしける

風をいたみくゆる煙の立出て猶こそすまの浦を戀しき

貫之

はしめて女のもとにつかはしける

いはねともわか限なき心をは雲井に遠き人もしらまん

題しらす

君かねにくらふの山の時鳥いつれあたるこゑまざるらん

讀人しらす

せうろこかよはしける女をろかあるさまに
みお侍ければ

こをてぬる夢路に通ふをしるのなるかひをくうとき君哉

女につかはしける

かゝり火にあらぬ思ひのいかされは涙の川とうきてもゆらん

火のもとにまかりてあしたにつかはしける

待くらす日はすかのねにおもほせてあふよしもあど玉のをならん

大江千里まかりかよをける女を思ひかれか

たに成て遠き所にまかりわたるといはず

久しうまからすなりにけり此女思ひ侘てね

たるよの夢にまうてきたりとみおければう

たかひにつかはしける

とかなかる夢のしるしにはかくれて現にまくる身とや成あん

あくてつかはしたりければ千里みはへりて

まことにをどひあんかへりまうてこしかど心

ちのなやましくてあんありつるとはかりい

ひをくりて侍ければかさねてつかせしける

思ひねの夢といひてもやみなまし中々なにありとしりけん

やまどのかみに侍ける時かのくにのすけ藤

原清秀かむすめをむかへんとちきりておほ

やけことによりてあからさまに京にのほり

たりける程にこのむすめ眞延法師にむかへ

られてまかりにければ國にかへりて尋てつ

かはしける

いつしかのねになきかへりこしかど野へのあさははいる付にけり 忠房朝臣

せころこつかはしける女の返事にまめやか

にしもあらしなといひて侍ければ

ひさまゆのかくふたかりせまほしみくはこきたれてなくをみせはや

ある人のむすめあまたありけるをわねより

はしめていひ侍ければときかさりければ三に

あたる女につかはしける

關山の峯の杉むらすきゆけとあふみは猶うはるけかりける

あまたの朝臣久しうをどもせてふみをこ

せて侍ければ

思ひ出て音つれしける山ひこのこたへにこりぬ心なになり

いとしのをてまかりありきて

よみひとしらす

まどろまぬ物からてぬてしかすかに現にもあらぬ心ちのみする

うつしにもあらぬ心は夢なれやみてもはかなき物を思へは

うつまさわたりに大輔か侍けるにつかはし

限なく思ひ入日の友にのみにし山へをなかめやるかな

仇し名のたつにどかき身なりとはなほよる人にあしてみましや

たぬぬるとみればあひぬる白雲のいとおほよるに思はずもかき

けふそへお暮さらめやはと思へともこぬぬは人のこゝろなりけり

いとかくてやみぬるよりは稻妻の光のまにも君をみてしか

いたつらに立かへりにし白浪の名残に袖のひる時をまし

返し

ける

女宮のみこ

返し

みくしけどのにはしめてつかはしける

道風忍てまうてきけるにおやきつつけてせ

いしければつかはしける

大輔かもとにまうてきたりけるに侍らさう

けれはかへりての又あしたにつかはしける

朝忠朝臣

大輔

小野道風朝臣

忠房朝臣

女五のみこ

あつたゝの朝臣

返し

まにゝかは袖のぬるらん白波のなこりありけもみぬぬ心を

よしふるの朝臣さらにおはしどちかこを

ちかひでも獨思ふにはまけにけりたか爲をしき命ならぬは

まにはめにみつとはおしに昔のねのよのみしからて明る佗しき

物いはんどてまかりたりけれとさきたちて

かへるへき方もおほぬす涙川いつれかわたるあさせなるらん

涙川いかる瀬よりかへりけんみなるゝみをもあやしかりしを

池水のいを出る事のかたければみこもりなからとしもへにける

大輔

藏内侍

道風

大

大

大

敦忠朝臣

後撰和歌集巻第十三

戀歌五

題不知

枇杷大臣歌之諸本此如

いせの海にあそぶあまとも成にしかな浪かき分てみるめかつかん

在原業平朝臣

臙げのあまやくいせの海の浪たかき浦におふるみるめは

いせ

つれなくみえ侍りける人に

讀人しらす

題不知

あからへは人の心もみるへきに露の命をかあしかりける

獨ぬる時はまたるゝ鳥の音もまれにあふ夜は佗しかりけり

小野小町があね

女のうちみをこせて侍ければつかはしける

ふかやふ

空蟬のむかしきからにる迄も思んと思ふ我ならなくに

あたるおとこをわひしりて心さしはある

とみおあからあをうたかはしくおはせけれ

いつ迄のはかなき人の言のはか心のあさの風を待らん

讀人不知

題しらす

うたゝねの夢はかまふるあふ事を秋の夜すから思ひつるかな

女のもどにまかりたりけるに門をさしてあ

けさりければまかりかへりてあしたにつか

はしける

秋の夜の草の戸さもの佗しきはあくれと明ぬ物にる有ける

兼輔朝臣

返し

いふからにつらさるまざる秋の夜れ草の戸さしにさはるへしやは

讀人不知

かつらのみこにすみはしめけるあひたにか

のみあをれもはぬけしきありければ

さたかすれみこ

人しれす物思ふ比のわか袖は秋の草はにれとらさりけり

忍むたる人につかはしける

贈太政大臣

しつはたに思をみたれて秋の夜の明るもしらす歎きつる哉

せころこかよはしけれどもまたあはさるけ

る男をこれかれあひにけりといひさはくを

蓮葉の上はつれなきからにこそ物あらかひはつくといふなれ

よみひとしらす

おとさのつらう成行とら雨のふりければつ

かはしける

ふりやめは跡たにみらぬうたかたのきあてとあまきよを頼む哉

女のもどにまかりてえあはてかへりてつか

はしける

あはてのみあまたのよをもかへるかな人めのしけきあふ坂にきて

女に物いた男ふたりありけりひとり返事

すときとていまひよりかつかはしける

あひくかたありける物をなよ竹のよにへぬ物と思ひける哉

女の心かはりぬへきをきとてつかはしける

ぬにあけは人わらへこくれ竹のよにへぬをたにかちぬと思はん

ふみつかとしける女のおやのいせへまかり

ければともにかかりけるにつかはしける

いせのあまと君しなりなはおあしくは戀しきほどにみるめからせよ

一條かもとにいとなむ戀しきといをにやり

たりければおにのかたをかきてやるとて

戀しくはかけをたにみぬなくさめよわか打舞て忍ふかは也

返し

かけみればいと心そまとはるし近からぬけのうときえけり

人のうすめに忍ひてかよひ侍けるにつらけ

るにみぬて侍ければせころこ有ける返事に

人とのうきをもしらすありかまし昔なからの我身ともかな

みられたる女に又物いはんとてまかりたり

讀人不知

一條

郭公あつきうめにしかひもなく聲をよにもきと渡る哉
ければ聲はしをからかくれければつかはしける

人のもとにはじめてまかりてつとめてつか

はしける

常よりもれきうかりける露さへかゝる物にろ有ける

忍ひてまてきける人の霜のいたくふりける

夜まからてつとめてつかはしける

をく霜の曉おきと思はすはきみかことのにこかれせましや

返し

霜をかぬ春より後のなかめにといつかは君かよかれせさりし

心にもぬらて久しくとはさりける人のもと

につかはしける

いせの海のおまのまてかたいとまをみなからへにける身をうららむる源真明朝臣

ぬかたう侍ける女の家のみへよりまかりけ

るをみていつこへいそといひいたして侍

ければ

あふ事のかたのへとてそ我はゆく身をかなしかに思つなしつ

題しらせ

藤原爲世

君かあたり雲井にみつゝ宮ち山折こぬゆかんだもしらなくに

讀人不知

男の返事につかはしける

俊子

思ふてふ言はばいかになつかしきものちうき物とれもはすもかあ

思ふてふ事こつられたくれ竹のよにふる人のいはぬあければ

思はんと我をたのめし言のはし忘草とつ今はなるらし

兼茂朝臣女
よみひとしらす

男のやまひにわつらむてまからて久しくあ

りてつかはしける

今迄も消でありつる露の身はをくへき宿のあればけり

遷し

言のほむみな箱かねに成行は露のやどりもあらまを思ふ

うらみをこせて侍ける人の返事に

忘なんといひしきにもあらなくに今は限と物あむふかは

たにしらす

現にはふせとぬくれすかき歸り昨日の夢をいつか忘ん

女につかはしける

さくら浪まなぐ立めるうらむをよはあさし共みつゝ思れば

西四條の前齋宮またみこにもものし給ひし時

心さし有て思ふ事侍ける間に齋宮にさたま

り給ひあければ其あくるあしたにさか木の

枝に侍ぞあさしかと侍侍ける

いせの海の千尋は濱にひるふ其今は何てふかひかあるへき

教忠朝臣

あさよりの朝臣とし比せうそこかよはし侍

ける女のもとよりようなしいまは思ひ忘れ

ねどはかりずで久しうなりにければことあ

んまにいなつきてせうそこもせすありにけ

れば

忘れねといふ心にかさふ君なれどとはぬはつらき物にそ有けぬ

本院のくら

たいしらす

春霞はかろく立てわかる共風より外に誰かどふへき

讀人しらす

かへし

めにみぬぬ風よ心をたへつゝやは霞の別ころせめ

いせ

土左かもどよりせうろと侍ける返事につか

はしける

ふか縁うめけん松のぬにしあらうすき袖にも浪はよせてん

さたもとのみこ

かへし

松山の未こす浪のぬにしあらは君か袖には跡もどまらし

土 左

女のもとよりさためなき心ありなとすたり
ければ

ふかく思ひろめづといひし言のは、いつか秋風吹てちりぬる

贈太政大臣

おどこの心かはるしけしきなりければたゝ

かりけるときこのおどこの心させりけるあ

ふきにかきつけて侍ける

人をもみ恨るよりは心からこれいまさりしつみと思はん

讀人不知

忍ひたる女のもとにせうろこつかはしたり

ければ

足曳の山下立けく行水のおかれてかへしとは、頼まむ

男の忠侍にければ

佗はつる時さへ物の悲しきはいつこを忍ぶこゝろなるらん

い せ

おやのまもりける女をいなをもをともいひ

はあたてどすければ

いなせといひなもはたれすうき物は身を心どもせぬよなりけり

おどこのいからうぬまうてこぬこといひて

侍りし

こすやあらんきやせんどのみ河さしの松の心をかもひやらかん

よみひとしらす

とまれと思ふおどこのいて、まかりければ

しゐて行駒のあしおるををたにおどわかやとにわたさうりける

物いひける人の久しうをどつれさうりけるか

らうしてまうてきたりけるになどかひさし

うといへりければ

年をへていけるかいなき我身をは何かは人にありとしられん

いと忍てまてきたりけるおどこのをせいしけ

る人ありけりのしりければかへりまかり

てつかはしける

あさりする時う詫しき人しれすおにはの浦にすまふ我身は

公頼朝臣いままかりける女れもどにのみま

かりければ

おかめつつ人まのよふて鳥いつかたへどか行かへるらん

寛堪法師母

忍ひたる人に

人ここの難みかたさは難波ある声のうらはのうらみつくしな

讀人不知

恐てかよひ侍ける人いまかへりてなとたの

めをさておはやけのつかひにいせのくよ

まかりかへりまてきてひさしうとはす侍け
ねは

人はかりのくまはきたあくて清きあきさをいふて過けん
返し

誰たぬにわれか命をふかはまの浦にやとりをしつゝかはこし
女のもとにつかはしける

せきもあへすか淵にうまよふ涙川わたるてふせをしるよしもかな
返し

淵なから人かよはさし涙河わたらはあさきせもころはみれ
つねにまうてきてものなどいふ人のいまは

あまうてころ人とうたていふなりといをい
たして侍ければ

さてかへるあをのみろたつから衣したいふひもの心とけねは
左大臣河原にいてあひて侍けれと

たゝぬ共な思をけん涙川なかれあふせもありける物を
大輔につかはしける

今ははや三山を出てはさきすけちかきこゑを我にさかせよ
返し

少將内侍

兼輔朝臣

よみひとしらす

内侍たひらけいこ

左大臣

人はいざ山かくれの郭公あらはぬさとはすみうかるへし

左大臣につかはしける

ありしたにうかりし物をおはすしていつこにうふるつくさなるらん
右近衛につかはしける

中務

思を侘君かつらさに立よらは雨も人めももらさらなん

たかあきらの朝臣にふみをいくるとて

ふね竹のよとのふるねはかはる共をのかよいははあらすもあらなん
こと女に物いふとさくてもとのめの内侍の

左大臣

ふすへ侍ければ

めもみぬす涙の雨のしくるれば身のぬれきぬはひるよしもあし

よしふるの朝臣

返し

にくからぬ人のきせけんぬれきぬは思をにあへす今かはきまん

中將内侍

題不知

大かたはせとたにかけし天河ふかき心を淵とたのまん

小野道風

返し

淵とでも積やはする天川としお一たひ渡るてふせを

よみをとしらす

みくしけとのゝへたうにつかはしける

身のならん事をもしらすこく舟は浪の心もつらまざりけり

きよかけの朝臣

こといてきて後に京極浄息所につかはしけ

もとよしのみこ

佗ぬれば今はたおなし難波なるみをつくしてあはんどる思

みしのひてみくしけ殿のへたうにあをかた

くふとさしてちの左大臣のせいし侍けれ

は

いかにしてかく思ふてふ事をたに人つてあらて君にかたらん

敦忠朝臣

公頼朝臣のむすめに忍てすめ侍けるにわつ

らふ事ありてしぬへしとかへりければつか

はしけり

諸共にいさといはすはしての山こゆどもこそさん物ならなくに

朝忠朝臣

年をへてかたらふ人のつれなくのみ侍りけ

れはうつるひたるきくにつけてつかはしけ

る

かくばかりふかき色にも移らふを猶君をかくの花といひなん

清蔭朝臣

人のもとにまかりたりけるに門よりのみ返

しけるにからうしてすたれのもとによひよ

せてかうてさへや心ゆかぬといひいたした

りければ

いさや又人の心も白雲のゆくにもとにも袖のみをみつ

讀人しらす

人のもとにまかりけるをわはてのみ返し侍

ければみちよりいひつかはしける

よるしはのみちくる浦もおもはぬすあふ事をみに歸ると思へば

人をおもひかけていひわたり侍けるをまぢ

だをにのみ侍りければ

かすまらぬ身は山のはにあらぬともおほくの月をすくしひる哉

久しといひわたり侍けるにつれなくのみ侍

ければ

たのめつゝあはて年ふる鶴にこりぬ心を人はしらなむ

ありひらの朝臣

返し

夏虫のしるくまどふ思ひをはこりぬかなしと誰かみさらん

いせ

返しせぬ人につかはしける

返し

打佗でははらん聲に山彦のこたへぬ山はあらしとる思ふ

讀人しらす

山彦の聲のまにくどひゆかばむなしき空に行やかへらん

かくいひかはすほどにみとせはかりに成侍

ければ
あら玉の年のみとせは空蟬のむなしきねをや鳴てくらさん
たいしらす

あかれ出る涙の川の行末はつゐにあふみの海と願まん
あめのふる日人につかはしける

雨ふれどふらねどぬるゝわか袖はかゝる思ひにかはかぬやまろ
返し

露はかりぬるらん袖のかはかぬは君かおもひのはとやすくなき
女のもとにまかりたるにたちあからかへし

たればみちよりつかはしける
つねまよもまどよびくろ歸りつるあふみちもなき宿に行つゝ

雨にもさはらすまできてつら物かたりをど
しけるれどこの門よりわたるとてあめのい

たくふれはなんまかりすきぬるといひたれ
は

ぬれつゝもくるとみぬしは夏引の手ひさに絶ぬ糸にやありけん
数ならぬ身はうき草となりあらんつれなき人によるへなられし

夕やみは道もみぬねとふる里はもどこし駒にまかせてろくる
返し

駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひける哉
朝綱朝臣の女にふみまどつかはしけるをこ

と女にいひつきてひざしうまりて秋とふら
ひて侍りければ

いつかたにこそつてやらんかりかねのあふこと稀に今はあるらん
おどこのかれはてぬにことおどこをわひし

りて侍けるにもどの男の東へまかりけるを
さいてつかはしける

ありとたにきくへき物をあふ坂の關のあまたるはるけかりける
返し

關守はあらたまるとあふ坂のゆふつけどりは鳴つゝろ行
又女のつかはしける

ゆきかへりきてもきかなんあふ坂の關にかはれる人もありやど
かへし

もる人もありとはさけとあふ坂のせきもとゝめぬわか涙哉

かれにける男のおもひ出てきてきて物など
いひてかへりける

かじらさやくめちにわたす船橋の中々にてもかへりぬる哉
返し

中絶てくる人もまさかつらきのくめちのはしはいとあやうし

しろきさぬともきたる女ともあまた月あ

かきに待けるを見てあしたにひとりかもと

たつかはしける

白雲のみな一射にみおしかと立出て君を思ひよめてき

女のどににわかはしける

よろなれど心ばかりはうけたるをあとか思ひにかはらざるらん

たいしらす

我戀の消るまもなくもしきはあはぬ歎きやもぬ渡るらん

返し

あやすのみもゆる思ひは隠けれど身もこかれぬる物にそ有ける

又おどこ

うへにのみを雨にもゆるかやも火のよにもそこには思ひこかれし

又返し

藤原有好

よみひとしらす

川どのみ渡るを見るにあふさまてくるしき事ういやまさりなる

又おどこ

水まざる心ちのみしてわかたりにうれしきせをばみせしとやする

後撰和歌集卷第十四

戀歌六

人のもどにわかはしける

あふ事をよどにありてふみつのもりつらしと君をみつる比哉

返し

みつのもりもこの比の蘇めには恨もあへすよとの川まみ

みつからまてきて夜もすから物いも待ける

うさよとはかもふ物から天の戸のあくるはつらき物にろ有ける

女のもどにわかはしける

うらむれとこふれと君かこといもにしらすかほにてつれおかるらん

返し

恨むともこふ共いかく雲井よりはるけき人を空にしるべき

いひわつらひくやみにける人に久しうあり

て又つかはしける

よみをとしらす

しつはたにへつる程にしら原のたねぬる身とは思はさらなん
かへし

やつるよりうとく成にししつはたの京はたねてもかをやなるらん
おどこのまてきてすき事をのみしければ人

やひかにみるらんとて

くることばつねあらす共玉かつらたのみはたねしとおもほゆる哉
返し

玉かつらたのめくる日のかすはあれとたねくにてはかひをかりけり

おどこの久しうをとつれさりければ

いにしへの心はあくや成にけんたのめしこと絶て年ふる

かへし

いにしへも今も心のあければそうきをもしらて年をのみふる

おどこのたくなりける時はつねにまうでき

けるか物いひて後はかどよりはたれとまて

こざりければ

絶さりし昔たにみしうき橋をいまは渡ると音にのみさく

いひ花てふたとせはかりおどもせすかりに
ける男の五月こかりにまうてきてとし願ひ

さしうありつるなとひひてまかりにけるに

忘られて年ふる里の郭公まにこゑまきて行らん

題不知

とふやとてすきなさやせにきたれと戀しき事をそしるべしける

物いひ花て女のもとにひひやりける

露の命いつ共しらぬまの中になどかつらしと思ををかる

女のはかに侍けるをそこにとをしふる人も

侍らざりければ心つからとふらひて侍ける

返事につかはしける

かち人のたつぬるしかはぬなひのにあはてのみころあらまほしけれ

忍ひたる女のもとよりおどかおどもせぬと

中たりければ

小山田の水をらなくにかくはかりなかれそめてはたねん物かば

男のまててありしつてあめのふる夜おほ

かさをこひにつかはしたりければ

月よたにまつほとおほく過ぬれば雨もよにこしとおもほゆる哉

はしめて人につかはしける

思をつゝまたいひをぬわかてひをおおし心にしらせてしかな

右大臣

これひらの朝臣
女いまき

よみ人しらす

いひわつらひてやみけるを又おもひいて
とふらひ侍ければいとさためなき心かなと
いひてあすか川のこゝろをいそつかはして
侍ければ

あすか川は心のうちにあかるればうこのしからみいつかよとまん
思ひかけたる女のもとに

ふしのねをよりにささし今ははかおもひにもゆる煙ありけり

返し

しるしなき思をとり聞ふしのねもかことばかりの煙なるらん

いひかはしける男のおやいといたうせいす
とききて女のいひつかはしける

いひさしてとめらるなり池水の浪いつかたに思ひよるらん
おあし所に侍りける人の思ふ心侍りければ

いはて忍びけるをいかなるおりにかありけ
むあたりにかきておとしける

しられしなわか人しれぬ心もて君をおもひのおかにもゆとは
こゝろさしをば衰とおもへど人めにかんつ

いむといひて侍ければ

あさよりの朝臣
よみ人しらす

あふばかりあくてのみふるはか戀を人めにかくることの花しさ

たいしらす

夏衣身にはなるともわかためにうすき心はかけすもあらまん

いかにしてことかたらはん郭公おけきのしたになければかををし
思つゝ經にける年をしるへにておれぬる物はこゝろありけり

ふみおとつかはしける女はことねどこにつ
き侍りけるにつかはしける

我ならぬ人すみのえの岸に出てなにはのかたを恨つるかか
とんのふかれかたよあり侍にければとめ

源とゝのふ

をさたる笛をつかはすとて

にこり行水にはかけのみねはころあしまよふねをといめてもみめ

よみ人しらす

菅原のおははまうちきみの家に侍ける女に
かよひ侍けるれど中たへて又とひて侍り

ければ

すかはらやふしみの里のわれしより通ひし人のあども絶にき

女の男をいとをてさすかにいかおほねけ

んいへりける

ちこやふる神もあらぬ我中の雲井はるかに成も行哉

返し

ちはやふる神にもなにかたどふらんをのれ雲井に人をあしつゝ
女三のみこに

あつよしのみこ

うきしつむ淵せにさはくには鳥はろこも長閑にあらしとぞ思
又わかうちかひに人のものいふとききて

藤原守文

松山になみ高き音をさこゆなり我よりゆか人はあらしを
おどこのもとに雨ふる夜かさをやりてよを

けれどこさうければ

さしてこと思ひしみのをみかさ山かひあくまのもりける哉

返し

よみ人しらす

もるめのみあまたみゆればみかさ山しるくいかさして行へき

女のもとよりいといたくな思ひ侘うとたの
めをこせて侍りければ

なくさむる言のはにたにかゝらすは今もけぬへき露の命を
とよしのみこのみそかにすみ生ける頃今こ

兵衛

んどたのめてこそ成にければ

人しれすまつにぬくれぬ有明の月にさへころあさむかれけれ
忍てすみ侍りける人のもとよりかゝるけし

き人にみすなといへりければ

立田川たちあは君かなををしみいはせの杜のいはしとぞ思ふ

元方

宇多院に侍ける人にせうろこつかはしける

うたの野はみゆかし山かよふと鳥よふ聲にさへこたへさるらん
返し

よみ人しらす

みいあしの山をらす共よふと鳥何かはさかん時ならぬ音を
つれなく侍ける人あ

女五のみこ

こひ侘てしぬてふ事はまたなきをよのためしにも成ぬへき哉
たちよりけるに女にけて入れればつかはし

たゝみね

ける

頼みなはかくへ入ける君によりおどか涙のとへはいつらん
あそにける女のみたあはさりければ

よみ人しらす

しらすりし時たにこぬしあふ坂をなと今更に我まどふらん
女のもとにまかりうめてあしたに

藤原かけもと

わかすして枕れ上に別にし夢ちを又たつねてしかな
おどこのどはすありにければ

音もせず成も行哉鈴鹿山こゆてよなのみたかく立つゝ

返し

このぬてををなたゝみる鈴鹿山いとまぢかくあらんと思を
女に物いはんとてきたりけれどもこと人よ
物いをければかへりて

我爲にかつはつらしと三山木のこりともみぬぬかゝる戀せし
返し

あふてあき身とはしなるく戀すどて歎きこりつむ人はよきかは
人につかはしける

あさとに露はをけども人こふる我言のはい色もかはしす

かいせん法師

きて物いをける人のおはかたはむつましか
りけれどもちかうはぬあはすして

まぢかくてつらきをみるはうけれどもうきは物かは戀しきよりは
女のもどにつかはしける

讀人不知

つくしなる思をうめ川わたりなす水やまさらんよどむ時なく

藤原さねたゝ

返し

渡りてはあたにあるてふうめ川の心つくしに成もこそすれ

よみをとしらす

男のもどより花さかりにこんどいきてこぞ
りければ

花盛すくしし人はつられれと言のはをさへかゝしやはせん

おどこの久しうどはさりければ

思ふ事をまつに月日はとこゆるきのいろにや出て今は恨ん

右 近

あひしりて侍ける人のもどに久しうまから

さりければ忘草をにをかたねとををしはと

いふををいひつかはしたりければ

忘草猶もゆかしみかりにてもあふてふやとは行てたよみし
返し

讀人不知

うき事のしけき宿には思草うへてたにみし秋う侘しき

女ども忘どもに侍りて

敷しらぬ思をば君にある物ををき所なき心ちころすれ
返し

返し

をき所なき思ひとしきつれば我にいくらもあらしとる思

元長のみこに夏のさうろくしてをくるとて

ろへたりける

わかたちてきるころうげれ夏衣大方よのみみへさうすさを

南院式部卿のみこれ女

ひさしうどはさりける人の思ひ出てこよひ

までこんかどさらてあひまてとすてまでこ

ざりければ

八重葎さしても門を今更に何に悔しくおけて待けん

よみ人しらす

人をいひわつらひてこそ人にあひ侍てのち

いかくありけんはしめの人に思ひかへりて

ほどへにければふみはやらすしてあふきに

たかさこのかたかきたるにつきてつかはし

ける

さをしがの妻なき戀を高砂の尾上の小松さきもいれなん

源廉明朝臣

返し

さを鹿の聲たかさこにぎこねしは妻なき時れ音にこそ有けれ

讀人しらす

おもふ人にぬあを侍らてわすられにければ

せさもあへず涙の川のせをはやみかゝらん物と思ひやはせし

題しらす

せをはやみ絶すなかるゝ水よりもたねせぬ物は戀に有ける

こふれどもあふ夜なき身は忘草夢路あさへや生しけるらん

世中のうきはなへてもなかりけりたのむかきりを恨られける

たのめたりける人に

夕されは思ひうしけさまづ人のこんやこしやの定なければ

女につかはしける

いとはれくかへりこしちの白山はいりぬにまどふ物にうありける

源よしの朝臣

たいしらす

人なみにあらぬ我身は難波ある声のねのみろしたになるゝ

よみひとしらす

白雲の行へき山もさたまらず思ふかたにも風はよせなん

世中に猶有明の月なくてやみにまどふをどはぬつらしな

さたまらぬ心ありと女のいふたりければつ

かはしける

あすか川せきてとくむる物ならば淵せにあると何かいはれん

贈太政大臣

久しうまかりかよはすなりにければ十月は

かりに雪のすこしふりたるあしたにいひ侍

ける

身をつめは哀を思ふ初雪のふりぬること誰にいはまし

右 近

源たゝあきらの朝臣十月斗にどこ夏をおり

てて送侍ければ

冬なれど君か垣ねにささぬればむへとこ夏に戀しかけり

よみひとしらす

女れうらむる事ありてねやのもとにまかり

わたりて侍けるお雪のふかく降て侍ければ

あしたに女のむかへあくるまつかはしける
せうろこにくはへてつかはしける

兼輔朝臣

返し

白雪のけさつとなる思ひ哉あはてふるよのはともへなくに

よみひとしらす

白雪のつもる思ひも頼まれず春より後はあらしと思へば

心ざし侍女みやつかへし侍ければあふ事か

わか戀しきみかあたりをはなれては降白雪も空にさゆらん

返し

山かくれきぬせぬ雪の化しきは君松のはにかりてふる

物いゝ侍ける女にとしのはてのころほひつ

かはしける

あら玉の年はけふあすこぬへしあふ坂山を我やをくれむ

藤原時雨

後撰和歌集巻第十五

雑歌一

仁和のみとさかの傍時のれいにてせり川に

行幸し給ける日

さかの山みゆきたぬにしせり川の千世のふるみち跡は有けり

在原行平朝臣

ねなし日たかひにてかりきぬの袂につる

のかたをぬをてかきつけたりける

れきなさひ人などかめりかり衣けふばかりどうたつもなくなる

行幸の又の日おん致仕の表奉りけるさのど

ものりまたつかさたまはらさりける時とど

のつゐて時とどしはいくらばかりにか成ぬ

るとどひ侍ければ四十余になんなりぬると

すければ

今迄になどはか花のさかすしてよそとせあまり年頃はする

贈太政大臣

返し

はるくのかすは忘す色ながら花さかぬきをそにかうへけん

友則

外吏にしはくまかりありきて殿上おりて侍

ける時かぬすけの朝臣のもとにつかはしける

よどもに攀へふもとへりのはり行雲の身は我に有ける

平赤かき

また后に成給はさりける時かたはらの女侍

立ちぬみ給けしきなりける時後門多さうし

に忍て立より玉へりけるに滲たいめんはさ

くてたてまつり給ひける

ことしけしははたてれよひのまにをけらん露は出てはらはん

嵯峨后

家に行平朝臣まうてきたりけるに月のおも
しろかりける夜さけおとたうへてまかりた
らんとしけるほどに

てる月を正木れつなによりかけてあかす別る人をつなかん

河原左大臣

返し

限なき思ふのつなのなくはころ正木のかはらよりもなやまめ

行平朝臣

よの中をおもをうして侍けるころ

住佗ぬ今は限と山とどにつま木こるへきやともとめてん

業平朝臣

我をしりかほにないひろと女のいを侍ける

返しに

芦曳の山にれひたるしらかしのしらしな人を招きまるとも

みつね

すかたあやしと人のわらひければ

いせの海のつりのうけあるさまなれと深き心は底にしつめり

おほきれはいまうちきみのしら川の家さま

侍て

白川の瀧のいとみまはしけれとみたりに人をよせしれとや

中務

返し

しら川の瀧のいとなみみたれつよるをそ人はまつといふこ

おほきおほ
いまうちきみ

はちすのはいにる人は思らんよには戀ちの中にけひつゝ

あふ坂の關に庵室を作りてすみ侍おくに
かふ人をみて

よみをとしらす

あふ坂の關に庵室を作りてすみ侍おくに

是やこのゆくもかへるも別つゝしるもしらぬもあふ坂の關

蟬丸

さためたる男もかくて物思ひ侍るころ

あまのすむ浦こく舟のかちをなみよをうみ渡る我ろかふしき

小野小町

あひしりて侍ける女心にもいれぬさまに侍

ければこと人の心さしあるにつき侍にける

をなをしもあらず物いはんどアつかはした

りけれと返事もせず侍ければ

よみ人しらす

法皇てらめくりし給ける道にてかくての枝

をおりて

このみゆき千年かへてもみてしかかゝる山ふし時よあふへく

素性法師

西院の后おはんくしおろさせ給ておこさは

せ給ける時かの院のなかしまの松をけつり
てかきつけ侍ける

音にさく松かこら島けふるみるむへも心あるあまはすみけり
齋院のみそぎの垣下に殿上の人とますから

我のみは立るかへらぬ曉にわきてもをける袖の露哉
て曉にかへりてむすかもどにつかはしける

しほさきとしたりみあへて侍ければ
しほさきとしたりみあへて侍ければ

しほさきとしたりみあへて侍ければ
しほさきとしたりみあへて侍ければ

ひたれこれひあつかはしたるにうらなんな
さうればさしとやいかいといひたれば

住吉の岸ともいはいはしおきつ浪猶うちかけようらはなくとも
法皇はしめて御くしおろし給て山ふみし給

あむた后をとしめ奉て女御更衣なせむとつ
院にさふらひ給ける三年といふにあんみと

かへりおはしましたりける昔のことおなし
所にておはんおくしあふけるつゝてに

このはに絶せぬ露はをくらんや昔おはゆかまをのしたれば
御返し

右衛門

たみ

藤原元輔

七條のきつら

うみどのみまど井の中は成ぬめりうさからあらぬ影れみゆれば

しかのから藤にてはらへしける人のしもつ

かへみるといふ侍けりおはどものくるぬ

しるこにまてきてかのみるに心をつけてい

ひたはふれけりはらへはてくるまよりく

るぬしにものかつけけりそのものこしにか

きつけてみるにをくり侍ける

なにせんにへたのみるめを思ひけむおきつ玉もをかつし身にして

月のおもしろかりけるをみて

ひるおれやみるまかへつる月影をけふとやいはん昨日とやいはん

五節のまひ姫にてもしめしとめらる事

やあると思ひ侍けるをさもあらざりければ

悔しくそ天津乙女と成にける雲路尋る人もなきよに

太政大臣の左大將にてすまをのかへりある

し侍ける日中將にてまかりて事ををいり

てこれかれまかりあかれけるにやむとまき

人二三人はかりとめてまらうとあるしと

けあまたたひの後あひにのりてことものう

藤原滋包かむすめ

いせ

へなとやけるつゐてに

人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまごひぬる哉

兼輔朝臣

女どもたちのもとにづくしよりさしくしを

心さすどて

なにはかたなにもあらずみをつくし深き心のしるしはかりろ

大江玉淵朝臣女

元長のみこのすみ侍ける時てまさくりにあ

にいれく侍りけるはこにありけんしたをひ

してゆひて又こん時にあけんとして物のかみ

にさしをきて出侍にけるのちつねあきらの

みこにとりかくされて月日久しく侍てあり

し家にかへりてこのはこを元長のみこに送

るどて

あけてたになにかはせんみつのぬのうつ鳥のこを思ひやりつゝ

中務

忠房朝臣のかみにて新司はるかたかまう

けに屏風てうしてかの國の名わる所くゝゑ

にかゝせてさひねといふ所にかけりける

どしをへてにこりたにせぬさひねには玉もかへりてどろすむへき

たゝみね

兼輔朝臣宰相中將より中納言にありて又の

どしのりゆみのかへりたちのあるしにまかりてこれかれ思ひをのふるつゐてに

故郷のみかさの山は遠けれどゑは昔のうとからぬかあ

兼輔朝臣

あはちのまつりこと人の住はてゝのほりま

うてきてのころ兼輔朝臣のあはたの家にて

さひ植し人はむへころ老にけれ松のこたかく成にける哉

みつね

人のむすめに源かねきかすみ侍けるを女の

はゝ聞侍ていみしうをばし侍けれを忍ひた

るかたにてかたらひけるあをたにはゝしら

すして俄にいさければかね木かにけてまか

りにければつかはしける

小山田ねおとろかしにもこさうしをいとひたふるにふけし合哉

女のはゝ

三條右大臣身まかりてあくる年の春大臣め

しありどさゝて齋宮のみこにつかはしける

いかてかのどしさりもせぬたねもかなあれたる宿に植てみる哉

むすめの女御

かの女御左のおほいまうちきみにあをにけ

りと聞てつかはしける

春ことに行てのみみんどしきりもせずといふたねはおひぬどかさく

齋宮のみこ

庶明朝臣中納言よかり侍ける時うへのきぬ
つかはすとて

右大臣

返し

いにしへも契りてけりな打はふきとを立ぬへし天のは衣

庶明朝臣

まさたゝろとの井物をとりたかへて大輔か
もどもてきたりければ

大輔

返し

ふる里のちらの都のはしめよりおれにけりともみゆる衣か

雅正

ふりぬとて思ひもすてしから衣よろへてあやな恨もろする
世中の心になはぬなどすければゆくさき
たのもしき身にてかゝる事あるましど人の
才侍ければ

なかれてのよをも頼ます水の上の淡に消ぬるうき身と思へば

大江千里

藤原さねきか藏人よりかうふり給てあす殿
上まかりおりなんとしける夜さけたうへけ
るつゝめてに

むは玉のこよひはかりうわけ衣わけおは人をよろにころみめ

兼將朝臣

法皇御くしおろしをきてのころ
人渡す事たになきをおにしかもあからの橋と身の成ぬらん
ゆ返し

七條后

ふるし身は涙の中にみゆればや長柄の橋にあやまたるらん
京極れみやす所あまにありて戒うけんとして

いせ

仁和寺にわたりに侍ければ

獨のみ詠て年をふるさとのあれたるさまといかに見るらん

あつみのみこ

女のあたおとといひければ

まめおれとわたなは立ぬたかの嶋よる白浪をきれきぬにきて

あさ綱の朝臣

あひかたらひける人の家の松のこすゑも
みちたりけるを見て

年をへて願ひかひおしどきはふる松のこすゑも色かばり行

よみをとしらす

男の女のふみをかくしけるを見てもとのめ
のかきつけ侍ける

かたてつる人の心のうきはしをあやうき迄もふみ見つる哉

四條御息所女

小野よしふるの朝臣にしのかのうてのつ
かひにまかりて二年といふとし四位にはか
あらすまかりあるへかりけるをさるあらす

あふにければかゝる事あしむさうれにける
事のやすからぬよしをうれへをくりて侍け
るふみの返事のうらにかきつけてつかはし
ける

源公忠朝臣

返し

小野好古朝臣

玉くしけふたとせわはぬ君か身をあけなからやはあらんと思をし
あけなから年ふる事は玉くしけ身の徒になれはなりけり
後撰和歌集巻第十六

雑歌二

思ふ心ありて前太政大臣によせて侍ける

在原業平朝臣

頼まれぬうき世中を歎つゝをかけにおふる身をいかにせん
やまを侍であふみの關寺にぞもりて侍け
るにまへのみちより閑院のみこいし山にま
うでけるをたゞ今なんゆきすきにけると人
のつけ侍ければをてつかはしける
あふ坂のゆふつげに鳴鳥の音を聞とかめすを行過にける

としゆきの朝臣

前中宮宣旨贈太政大臣の家よりまかり出て
あるにかの家にことによれて日くらしとい

ふ事侍ける

み山よりひゞきさこゆる日くらしの聲を戀しみ今もけぬへし

宣旨

返し

日くらしの聲を戀しみけぬへくはみ山とをりにはやもきねかし

贈太政大臣

かはらよ出てはらへし侍けるにおほいまう
ちきみもいてあひて侍ければ

あつたゝの朝臣

ちかはれしかものかはらに駒とめてしはし水かへ影をたにみん

人のこしをかりて侍けるにしに侍ければい

閑院のみこ

わかのりし事をうしとや消にけん草はにかゝる露の命は

どりて

かくてのみやむへき物かちはやふる加茂の社の萬代をみん

三條右大臣

おなし侍時きたのゝ行幸にみこしをかにて

みこしをかいくそのせゝに年をへてけふのみゆきを侍てみつらん

枇杷左大臣

戒仙かふかき山寺にこもり侍けるにこと法

師まうできてあめにふりこめられて侍けるに

いつれをか雨ともわか山ふしのおつる涙もふりにころふれ

よみ人しらす

是かれあをて終夜物かたりしてつとめて
をくり侍ける

藤原興風

思ひには消る物もどしりなからけさしもおきてなにきつらん
わかう侍ける時はし賀につねにまうてける
をどしおをてはまいる侍らさうけるにま
り侍て

めつらしや昔なからの山の井はしつめるかけろくちはてにける
宇治のあしろにしれる人の侍ければまかり
て

よみ人しらす

うち川の浪にみなれし君ませは我も網代によりぬへき哉

大江興俊

院のみかど内におはしましし時人々にあふ
きてうせさせ給ける奉るとて

吹出るねどころたかくきこゆへはつ秋風はいさてならざし

小貳めのと

返し

心して稀に吹くる秋風を山おろしにはなさしと思ふ

大輔

おどこれふみおほくかきてといをければ

はかなくて絶なん駒のいとゆへになにかおほくかんとすらん
くらまのさかをよるこゆるとてよみ侍ける

よみひとしらす

昔よりくらまの山といひけるはわかこど人もよるや云ひけん

童子院にいまわ
ことめしける人

おどこにつけてみちのくにへむすめをつか

はしたりけるかろのおどこ心かはりたりと

きよて心うしもおやはいひつかはしたりけ

れば

雲井ちのはるけき程の空ことばいかなる風の吹てつけん

よみひとしらす

返し

あま雲のうきなる事とさししかと猶る心と空になりにし

女のは

たきさかにかよへりけるよみをこひかへし

ければろのふみにくしてつかはしける

やればれしやらねば人にみいぬへしかくくも猶かへすまされり

もどよしのみこ

延喜御時御むすをつかはしてはやくまいる

へきよしはせせつかはしたりければすなは

ちまいりてればせ事うけたまはれる人につ

かはしける

望月の駒よりをろく出のれはたどるく山はこいつる

うせい法師

やまひして心はろしとて大輔につかをしけ
る

萬よと契しことの徒に人わらへにも成ぬへきかち

藤原敦敏

かけていへばゆしき物を万代と契しことやかちなるへき
あられのふるを袖にうけてきけるを海の
ほとりにて

大輔

ちるとみて袖にうくれとたまぬはわれたる浪の花に有ける
ある所のわらは女五節みに南殿にさふらひ
てくつをうしををてけりすけとみの朝臣く
ら人にてくつをかして侍けるをかへすとて

よみひとしらす

立さばく浪すを分てうつきてしれきのもへつをいつか忘ん
返し

輔臣朝臣

かつきてしれきのもへつを忘すはうこのみるめを我にからせよ
人のもをぬはせ侍にぬひてつかはすとて
限なく思ふ心はつくはねのこのもやいかあらんとすらん

讀人しらす

おとこのやまひしけるをよらはてありと
よてやみかたにどへりければ
思ひ出てもふ言のはをたれみまし身の白雲に成なましかは
みろかおとこしたる女をぬしくはいはてと

へと物もいはよりければ

忘なんと思ふ心のわくからにことのはさへやらへばゆしき

おとこのかちれて女を見たりければつかは
しける

かへれるてわからささまを水の上の漆共はやく思消せん
中をどかく思ひわつらひけるほどに女と
もたちある人猶わかいはんことにつさねと

かたらを侍ければ
人心いさや白浪たかければよらん瀧ろかねて悲しき

いたも事このむよしを時の人いふと聞て
なをきくにまかれる枝も有物をけをふきさすをいふかはりなさ

高津内親王

うつろはぬ心のふかく有ければこいらちる花春にあへること
これかれ女のもとにまかりて物いひなどし

嵯峨后

けるは女のあなさむの風やとすければ

よみひとしらす

玉たれのあみめのまより吹風の寒くはたへでいれんと思ひを
おとこの物いひけるをさばきければかへりてあ
したにつかはしける

白浪の打さはかれてたちしかど身をうしほにう袖はぬれにし

選し

どちもあへず立きはかれしわた浪にあやなく何に袖のぬれけん

題しらす

たうち共頼まざらん身に遊ぎ衣の關もありといふこ

どもたちの久しくあはさりけるにまかりあ

ひてよみ侍ける

あはぬまに戀しき道もしりにしをさどられしきにまどふ心う

題しらす

いかちりしふしにかいどのみたれけんしめてくれとも解すみゆるは

人のめにかよひけるみつけれ侍て

身なく共人にもられしよの申にしらぬ山をしるよしもかな

選し

世中にしらぬ山は身なきまもたにのえよるやいばで思はん

山の井のきみにつかはしける

音にのみさくてはやまむあはさ共いほふみしてむ山の井の水

よみ侍ける

賀朝法師

もとのれどこ

よみ侍しらす

しての山たどりくこころをらんうきよの中になにかへりけん

選しらす

数ならぬ身をいもたして吉野山高きなげさを思ひこりぬる

選し

吉野山をん草をうかたかしめをむなげきの敷はしりあん

鳥成院のみかど時くどの井にさふらはせ

数ならぬ身にまよひの白玉は光みまます物にう有ける

まかりかよをける女の心をけすのみみ侍

うければとし月もへぬるをいまさへかふる

事といひつかはしたりければ

難波かた打のあしの老かまに招てよふる人のこころを

女のもともよりうちみをとせて侍ける返事に

わするとは恨まらむはむたかのどかへる山のしおはもみちす

むかしおちし所にみやつかへし侍りける女

のあまをたのむき人の國におちむたうける

と聞つけてあまうける人なればいひつかは

しらす

讀人しらす

むさし

白浪の打さはかれてたちしかと身をうしほにう袖はぬれにし

返し

とりもあへず立さはかれしわた浪にわやなく何に袖のぬれけん

題しらす

たうち共頼まさらなん身に近き衣の關もありといふこ

ともたちの久しくわはさりけるにまかりあ

ひてよみ侍ける

あはぬまに戀しき道もしりにしをさどうれしきにまどふ心ろ

題しらす

いかかりしふしにかいどのみたれけんしめてくれとも解すみゆるは

人のめにかよひけるみつけれ侍て

身なく共人にしられしよの中にしられぬ山をしるよしもかな

返し

世中にしられぬ山に身なくともたにのこるやいはて思はん

山の井のきみにつかはしける

音にのみさゝてはやましあさく共いさくみしてむ山の井の水

やまひしけるをからうしてをこたれりとき

して

賀朝法師

もとのれとこ

よみとてしらす

しての山たどりくどこゝからんうきよの中になにかへりけん

題しらす

敷ならぬ身をいもにして吉野山高きなげきを思ひこりぬる

返し

吉野山こねん事ころかたかしめこねむなげきの敷はしりあん

陽成院のみかど時くど井にさふらはせ

給けるを久しうめしなかりければ奉りける

敷ならぬ身にをくよひの白玉は光みくます物にろ有ける

まかりかよをける女の心どけすのみみ侍

りければとし月もへぬるをいまさへかゝる

事といひつかはしたりければ

難波かた汀のあしの老かよに招てろふる人のこゝろを

女のもどよりうらみをこせて侍ける返事に

わするとは恨さらむはしたかのどかへる山のしるはもみちす

むかしおあし所にみやつかへし侍りける女

のおどこにつきて人の國におちぬたりける

を聞つけて心ありける人なればいひつかは

しける

むさし

讀人しらす

遠近の人め稀なる山里にひるむせんとは思ひきや君

かへし

身をうしと人しれぬよを尋こし雲の八重たつ山にやはあらぬ

れとこを侍らすしてとほころ山さどにこ

もり侍ける女をむかしあをしりて侍ける人

みちまがりけるつゐてにひさしうきこゑさ

りつるをこゝにありけりといひいれて侍け

れは

あさかけによはうき事を忍つゝ詠せしまに年はへにけり

山さどに侍りけるにむかしあひしれる人の

いつよりこゝにはすむろとどひければ

春やこし秋や行けんおほつかあかけの朽木とよを過す身は

題しらす

世中はうき物なれや人このとにもかくにもきこゝくるしき

武藏野は袖ひつはかり分しかどわかむらさきはたつね佗にき

いとまにてこもりゐてかへりけるころ人の

とはすはへりければ

おはわらさの森の草とや成にけむかりにたにきてとふ人のあき

土 左

閑 院

貫 之
よみ人しらす

壬 生 忠 琴

有所にみやつかへし侍ける女のあたなたち
けるがもとよりをのれかうへはうこになん
くちのはにかけていはるなとらみ侍けれ
は

哀てふこところ常のくちのはにかゝるや人を思ふあるらん

題しらす

吹風の下のちりにもあらなくにさもちりやすき我なき名かな

かすかにまうてけるみちにさは川のはどり

にはひせよりかへる女くるまのあをて侍け

るかすたれのあきたるよりはつかにみいれ

ければあひしりて侍りける女の心さしふか

く思ひかはしあからはゝかる事侍りてあを

はなれて六七年はかりにありはへりにける

女に侍りければかのくるまにいひいれ侍り

ける

故郷のさはの川水けふも猶かくてあふせは嬉しかりける

琵琶右大臣よう侍てあらのはをもとめ侍け

れはちかぬかあひしりて侍ける家にどりに

讀 人 不 知

い せ

閑 院 左 大 臣

つかはしければ

かへし

わかやどをいつちらしてかゝらのはをあらしかほにはたりにおこする 俊 子
ならのはのほりの神のましけるをしらてうれりしたゝりなざるな 枇杷左大臣

ともたちのもとにまかりてさかつきあまた

いひになりければにけてまかりけるをど

いめわつらひてもて侍りける笛をとりど

めて又のあしたにつかはしける

かへりてはこゑやたかはん笛竹のつらき一よのかたみと思へは

返し

よみひとしらす

一ふしに恨なはてろふぬ竹のこゑのうちにも思ふ心あり

もとよりとともたちに侍ければ貫之にあをか

たらをて兼輔朝臣の家に名つきをつたへる

せ侍けるにろのなつきにくはへてつらゆき

にをくりける

人につくたよりたになし大あらしの森の下なる草の身なれば

み つ ぬ

兼忠朝臣母身まかりければ兼忠をは故枇

杷左大臣の家にむすめをはきさいの宮にさ

ふらはせんとあひさためてふたりをからま
つひはの家になたしをくるとてくはへ侍け
る

むすひをさし形見の子たにかかりせばなにも忍ぶの草をつまし

物れもひ侍ける頃やむ事なきたかきところ

よりとばせ給へりければ

兼忠臣朝母の
めのと

嬉しきもうきも心はひとつにてわかれぬ物はなみた也けり

よみをとしらす

世中の心になはぬ事申けるつゝてに

惜からて戀しき物は身ありけり憂世ろむかん方をしらねは

貫 之

思ふ事侍けるころ人につかはしける

思ひ出る事ろ戀しき世中は空行雲のはてをしらねは

よみ人しらす

たいしらす

哀其うしどもいはしかけるふのあるかあきかにけぬるよなれば
あはれてふ事になくさむ世中をあとか戀しといひて過らん

はりまのくにいたかかたといふ所におもし

ろき家もちて侍けるを京にてはくか思ひに

て久しうまからてかのたかかたに侍る人に

いひつかはしける

物思ふ行てもみねはたか方のあまのときやはくちやしぬらん

延喜御時どきの藏人のもとにううしもせよ

どおほしくてつかはしける

夢にたに嬉しどもみは現にて佗しきよりは猶まさりけむ

後撰和歌集卷第十七

雑歌三

みつね

いろのかみといふ寺にまうて、日のくれに

かゝれば夜明てまかりかへらんとてとま

りて此寺に遍昭はへると人のつけ侍ければ

物いひ心みんとていひ侍ける

岩の上に旅ねをすれはいと寒し苔の衣を我にかさふん

返し

をのゝこまち

世をろむく苔の衣はたゝひとへかさねはうどしいさふたりねん

法皇かへり見給けるをのちくは時をどろ

へありしやうにもあらずなりにければさど

にのみ侍て奉らせける

あふ事のとしきりしめる歎には身の數あらぬ物にう有ける

女のもとよりわたにきこゆることなといひ

せかゐのきみ

て侍ければ

あた人もなきにはあらず有なから我身には又聞うぢらはぬ

題不知

左大臣

宮人とならまほしきを女郎花のへよりきりの立出てろくる

かしてまゐる事侍てさどに侍けるを忍てさう

しにまいれりけるをおほいまうちきみのお

どかをともせぬをどうらみ侍ければ

讀人不知

わか身にもあらぬ我身の悲しきは心もことに成やしにけん

人のむすめに名たち侍て

大輔

世中をしらすなからもつの國のなには立ぬる物にうありける

なき名たちけるころ

よみ人しらす

よどいもにわかぬれきぬとなる物はわふる涙のきする也ける

前坊ればしまさすありての頃五節の師のも

どにつかはしける

うけれども悲しき物をひたふるに我をや人の思ひすつらん

返し

大輔

悲しきもうきもしりにしひとつを誰をわくどか思ひつるへき

大輔かさうしにあつたゝの朝臣のものへつ

よみひとしらす

かはしけるふみをもてたかへたりければつ
かはしける

道しらぬ物ならなくに足曳の山ふみまどふ人も有けり

返し

しらかしの雪も消にし足引の山ちを誰かふみまよふへき

いひちきりてのちこと人につきぬときよて

いふことのかかはぬ物にあらませはのちうきことも聞えさらまし

題しらす

おもかけをわひみしかすになす時は心のみころしつめられけれ

かしらしろかりける女をみて

ぬきとめぬかみの筋もてあやしくもへにける年の敷をしるかあ

題しらす

浪敷にあらぬ身なれば住吉の岸にもよらす成やはてなん

つきもせすうき言のはのれはかるをはやく嵐も風も吹ふん

いとしのひてかたらをける女のもとにつか

はしけるふみを心にもあらてねどしたりけ

るをみつけてつかはしける

しまかくれありろにかよふあしたつのふみをく跡はなみもけたふん

大 輔

敦 忠 朝 臣

よみひとしらす

い せ

よみをと

むかしおかし所に宮つかへしける人としこ
ろいかにうなとひをこせて侍ければつか
はしける

身はやくなき物のこと成にしをきぬせぬ物は心ありけり

はらからの中にかなる事かありけむつねな

らぬさまにみぬ侍ければ

むつまじきいもせの山のちかにはさへたつる雲の晴すも有哉

女のいとくらへかたく侍けるをわひはをれ

にけるかこと人にむかへられぬときよて男

のつかはしける

我爲にをきにくかりしはしたかの人のてにありと聞はまことか

くちなしある所にこひにつかはしたるにい

ろのいとあしかりければ

聲にたてゝいはねとしるしくちなしの色はわかためうすきこけり

題しらす

瀧津瀬のはやからぬをう恨つるみす共音にきかんと思へは

人のもとにふみつかはしけるれどこ人にみ

せけりときよてつかはしける

い せ

よみひとしらす

みな人にふみしせけりな水無瀬川その濺りこそまつはあさけれ

つくしのしら川といふ所にすみ侍けるに大

貳藤原興範朝臣のまかりわたるつゝゐてに水

たへんとてうちよりてこひ侍ければ水をも

ていてよみ侍ける

年ふればわか黒髪も白川のみつはくむまで老にける哉

かしこに名たかくことこのむ女にちん侍

けるしそくに侍ける女のおとこにちん侍

てかゝる事のなんある人にいをさはげと

いひ侍ければ

かさす共立どたちなんなき名をはことなし草のかひやなからん

題しらす

かへりくる道にろけさはまよふらんこれになすらふ花なき物を

女のもとにふみつかはしけるを返事もせず

してのちくはふみをみもせてとりなんを

くと人のつけられは

大空にゆきかふ鳥の雲ちをそ人れふみぬものといふなる

きの介に侍けるおとこのまかりかよはすな

ひかきの姫

貫之

讀人しらす

りにければかのをどこのあねのもとにうれ
へをこせて侍ければいと心うき事かかとい
をつかはしたりける返事に

きのくにのあくさの濱は君ふれやことこのいふかひありと聞つる

すみ侍ける女みやつかへし侍けるをともた

ちありける女おなしくるまにて貫之か家に

まうてきたりけり貫之かめまうとにある

しせんどてまかりおりて侍けるほどにかの

家を思ひかけて侍ければ忍ひて車にいをい

れ侍ける

浪にのみぬれつる物を吹風のたより嬉しきあまの釣舟

れどこれ物にまかりてふたどせはかりあり

てまうてきたりけるをほどへて後にことか

しひにこと人になたつときしはまとなり

といへりければ

操ふるまつほど過はいかてかはしたはかりもみちせさらん

故女四のみこのいちのわさせんとてはたい

のすすをなん右大臣もどめ侍ときしつて此す

貫之

よみひとしらす

いをねくるとてくはへ侍ける
思はくの煙やまさんなき人の佛になれるこのみねは君

真延法師

返し
道なれるこのみ尋て心さしありと見るにう音をばましける

右大臣

さためたる女も侍らす獨ふしをのみすと女
ともたちのもとよりたはふれて侍ければ

よみひとしらす

いつくにも身をははなれぬかけしわれはふす床とに獨やはぬる

前裁のちかにするの木おひて侍ときよてゆ
きあきらのみこのもとよりひと木こひにつ

かはしたればくはへてつかはしける

真延法師

返し
風しにも色も心もかはらねはあるしにたるうへきんけり

山ふかみあるしにたるうへ木をもみぬぬ色とろいふへかりける

行明のみこ

大井なる所にて人くさけたうへけるついでに

大井川うかへる船のかくり火にをくらの山もをのみをりけり

業平朝臣

題しらす
飛鳥川我身をどつの淵せゆへなへてのよをもうらみつる哉

よみをとしらす

思ふ事侍ける比志賀にまうて
世中をいとひかてらにこしかどもうき身なからの山にろ有ける

ちく母侍ける人のむすめに忍びてかよひ侍
ける家をきくつけてかうしせられ侍けるを
月日へてかくれにたりけれどもあめふりて
ぬまかり出侍らてこもり侍けるをちくは
いさくつけていかはせんするるとてゆる
すよしいを侍ければ

したにのみはひわたりにし芦のぬの嬉しき雨にあらはるゝ哉

人の家にまかりたりけるにやり水に瀧いと

かもしろかりければかへりてつかはしける

瀬津せにたれ白玉をみたりけんひろふとせしに袖はひちにき

法皇よしの瀧渉覽しける淨どもにて

いつのまに降つもるらん三吉野山はかひよりくつれ落る雪

宮の瀧むへもをにおきて聞へけり出つるしら淡の玉をむけば

山ふみしはしめける時

今更に我はかへらし瀧みつゝかへときかすと思はくこたへよ

たいしらす

法皇御製

僧正遍昭

たきつせのうつまきことにとめくれと猶尋くるよのうきめ哉
はしめてかしらわろし侍ける時物にかきつ
け侍ける

よみひとしらす

たらちめはかくれとてしもむは玉の我黒髪をちてすや有けん

暹

昭

みちのくにのかみにまかりくたれりけるに

たけくまの松のかれて侍けるをみて小松を

うへつかせはへりて任せてのち又同じく

にまかりなりてかのさきの任にうへし松

をみ侍て

うへし時契りやしけんたけくまの松をふたゝひみみつる哉

藤原もとよし朝臣

ふしみといふ所にてうの心をこれかれよ

みけるに

すかはらやふしみの暮にみ渡せば霞にまかふをまつせの山

よみひとしらす

たいしらす

言のはもなくへにける年月にこの春たにも花はさかなん

身のうれへ侍ける時つづくにまかりてす

すみはしめ侍けるに

なにはつをけふこそみつの浦をに是やこのよをうみ渡る舟

業平朝臣

時にあはすして身を恨てこもり侍ける時

白雲のきやとる峯の小松原枝しけれや日の光見ぬ

文屋康秀

心にもあらぬ事をいふころおどこのあふき

にかきつけ侍ける

土

左

身に寒くあらぬ物から佗しきは人の心のあらしなりけり

なからへは人の心もみるへきを露の命を悲しかりける

人のもどより久しう心ちわつらひてほど

くしくなんわりつるといひて侍りければ

閑院大君

諸共にいさどはいはしての山いかてか獨こねんとはせし

かんつけねみねれ

をしちへて峯もたむらに成ならん山のはさくは月もかくれし

後撰和歌集巻第十八

雑歌四

かはつをきいて

我やとにあひやとりしてすむかはすよるになれはや物は悲しき

よみひとしらす

人々あまたしりて侍りける女のもとにとも

たちのもとよりこのころは思ひさためたる

なめりたのもしき事なりとたわふれをこせ

て侍ければ

玉女こくあしかりを舟さしわけて誰れを誰とか我はさためん

おどこのはしめいかにおもへるさまにあり
けん女のけしきも心どけぬをみてあやしく

思はぬさまなる事といひ侍ければ

みちのくのおふちのこまも野がふにはわれこそまされなつくものかは

中將にて内にさふらひける時にあやしりけ
る女くら人のさうしにつはやあくるををか
けをやとしをきて侍けるを俄にこそありて
遠き所にまかりけりこの女のもとよりこの
れひかけををこせてあはれなる事をといひ
て使ける返事に

うつくどて尋さつらん玉かつら我はむかしの我ならなくに

源善朝臣

たよりにつきて人のくにかたはらに侍て
京に久しうまかりのほらさりける時に友立
につかはしける

あさとにみし都路の絶ぬればそのあやまりに向人もなし

よみひとしらす

遠さくに侍ける人を京にのほりたりとき

とてあひまつにまうてきなからとはさりけ

れは

いつしかとまつちの山の櫻花まちてもよろに聞か悲しさ

題しらす

いせわたる川は袖よりあかるればとふにとはれぬ身はうきぬめり

いせ

人めたにみぬぬ山ちに立雲をたれすみかまの煙といふらん

北邊左大臣

おどこの人にもあまたとへわれやあたある

云あるといへりければ

飛鳥川淵せにかはる心とはみなかみしもの人もいふめり

いせ

人むこのいまうてこんといひてまかり

にけるか文をこする人ありときいて久しう

まうてこさりければあどわかたりの心をど

りてかくなんすけるといひつかはしける

今こむといひしはつりを命にてまつにけぬへしつくさめの年

女のは

返し

敷ならぬ身のみ物うくおもはねてまたるゝ迄も成にける哉

むこ

つねにくどてうるさかりてかくれければつ

かはしける

ありとさく音羽の山の郭公なにかへるらんさく聲はして

よみかとしらす

ものにもりたるにしりたる人のつほねな
らへて正月をこそひていつかあか月にいと
きたなけなるしたうつをおとしたりけるを
とりてつかははすとて

あしのうらのいときたなくもみゆる哉なみはよりてもあらはざりけり
たいしらす

人心たどへてみれば白露のきゆるまも猶久しかりけり
世中といひつる物かかけろふのあるかなさかの程に有ける

ともたちに侍ける女の年久しくたのろ侍け
るふとこにとはれす侍ければ諸どもになく
きて

かくはかり別のやすき世中につねと頼める我ろこかなさ
つねになきな立侍ければ

ちりにたつわかなきよめん百敷の人の心をまくらともかな
あたなたちていひさはかれけるころあるお

いせ

とこほのかにきいてあはれいかにろとくを
侍ければ

うき事を忍ぶるたのし雨にして我ぬれきぬはほせどかはかす

小町かむまこ

となりなりけることをかりて返すつゝるにて

あふことのかたみの聲の高ければわかなくねども人はさかなん

よみかとしらす

たいしらす

涙のみしる身のうさもかたるへく歎く心をまくら共かな

物とをけるころ

あひにあひて物思ふ頃の我袖にやどる月さへぬるゝかはなる

いせ

有所にてすのまへにかれこれ物かたりし侍
けるをさしてうちより女のことにてあやし

く物のあはれしりかはなるれきなかなとい
ふをさして

哀てふことにしるしはなけれどいきてはむよろあらぬ物なれ

貫之

女どもたちのつねにいひかはしけるを久し
くをどつれさりければ十月いかりにあた
人の思ふといひし言のはといふふりことをい
ひつかはしたりければ竹のはにかきつけく
つかはしける

うつろはぬ何まかれたる河竹のいつれのに秋をしるへき

よみかとしらす

題しらす

ふかき思ふうめつといをし言のはいつか秋風吹てちりぬる

贈太政大臣

心なす身は草葉にもあしなくに秋くる風にかたかはるらん

い せ

たいしらす

身のうきをすればはしたに成ぬへし思へはむねのこかれのみする

よみをとしらす

雲ちをもしらぬ我さへもろ聲にけふはかりとろ鳴かへりぬる

い せ

またすから思ひこき色に染んとやわか紫のねをたつぬらん

まはせたりければ

いせの海に年へてすみしあまなれどかゝるみるめはかつかさりしを

あはたの家にて人につかはしける

足曳の山のやまどりかひりなし峯の白雲立しよらねは

かねすけの朝臣

左大臣の家にてかれこれ題をさくりて歌よ

みけるに露といふもしを侍て

我ならぬ草はも物は思をけり袖より外にをける白露

藤原のたゝくに

人のもどにつかはしける

人心あらしの風の寒ければこのめもみぬす枝をしほるゝ

い せ

こと人をあひかたらふときよてつかはしける

うきなからん人を忘んことかたみわか心ころかはらさりけれ

よみひとしらす

ある法師の源のひとしの朝臣の家にかかり

てすゝのすかりをおとしをけるをわしたに

をくるとて

うたゝねのどこにどまれる白玉は君かをきつる露にやあるらん

返し

かひもなき草の枕にをく露のなにゝ消なておちどまるらん

たいしらす

思ひやるかたもしられすくるしきは心まどひのつねにや有らん

むかしを思ひ出てむらこの内侍につかはし

ける

鈴虫におどらぬ音こそあかれけれ昔の秋を思ひやりつゝ

左大臣

ひとり侍ける比人のもどよりいかにうとゝ

ふらひて侍ければあさかほの花につけてつ

かはしける

夕暮のさむしき物はあき顔の花をたのめる宿に有ける

よみひとしらす

左大臣のかしれけるさうしのおくにかきつ

け侍ける

はいろ山峯の嵐の風をいたみふる言のはをかきうあつむる

つらゆき

たいしらす

世中をいどひてあまのすむかたもうさめのみにそみねわたりけれ

小町かあね

むかしあひしりて侍ける人の内にさふらむ

けるかもどにつかはしける

山川の音にのみき百しきを身をはやなからみるよしもかあ

いせ

人にわすられたりとさく女のもとにつかは

しける

世中はいかにやいかに風のをどを聞にもどは物や悲しき

よみひとしらす

返し

世中といひさ共いさや風の音はあきに秋うふ心ちころすれ

いせ

たいしらす

たどへくる露どひとしき身にしわれは我思ひにも消んとやす

讀人不知

つらかりけるれどこのはらからのもとにつ

かはしける

さゝかにの人にすかはる原よりも心ほろしやたらぬと思へは

返し

風ふけは絶ぬとみゆるくものへも又かきつかてやむとやはさく

ふしみといふ所にて

なにてて伏見の里といふをはもみちをどこにしけはこけり

題しらす

我も思ふ人も忌るなありう海のうら吹風のやむ時もなく

ひとしきこのみこ

足曳の山下とよみなく鳥も我こと絶す物思とふらめや

山田法師

神無月の一日めのみろかおとこしたりける

をみつけていひなとしてつとめて

いまはとて秋はてられし身なれともより立人をねやは忘るゝ

よみひとしらす

十月はかりおもしろかりし所なればとて北

山のほとりにこれかれあろひ侍けるつゐて

に

思ひ出てきつるもしるしもみちはの色は昔にかはらさりけり

兼輔朝臣

おなし心を

峯たかみ行てもみへきもみちはをわか井ならもかさしつる哉

坂上是則

しはすばかりにあつまよりまてきけるれど

このもとより京にわひしりて侍ける女のも
とに正月ついたちまでをどつれす侍ければ
まつ人わきぬときけともあら玉の年のみこゆるあふ坂の關

後撰和歌集第十九

離別 羈旅
みちのくにへまかりける人に火うちをつか

はすどてかきつける

かりくはうちてよく火の煙あらは心さすかをしのへどろ思ふ

賞 之

あをしりて侍ける人の東のかたにまかりけ

るに櫻のはなのかたにぬさをしてつかはし

ける

あた人のたむけにおれる櫻花あふさか迄は散すもあらなん

よみふとしらす

とをくまかりける人に餞し侍ける所にて

思ひやる心はかりはさいらしをなへたつらん空の白雲

しもつけにまかりける女にかゝみにろへて

つかはしける

ふたみ山どもにこねねとます鏡うこなる影をたくへころやる

よみふとしらす

しきのへまかりける人にたきをのつかはす

とて

信濃なる淺間の山もゆなればふしの煙のかひやなからん

す る か

とをきくにへまかりけるともたち火うち

にろへてつかはしける

このたひも我を忘れぬ物あらはうちみんたひに思ひ出せん

讀人不知

京に侍ける女子をいかある事か侍けんこゝ

ろうしどてとめをきていなはのくにへま

かりければ

打すろく君しいさはの露の身は浮ぬはかりろありと頼むを

む す め

いせへまかりける人どくいなんど心もとな

かるとききてたひのてうとなどどらする物

からたぬんかみにかきてとらするなをはむ

まといひけるに

れしと思ふ心はなくて此たひはゆく馬にむちをおほせつる哉

返し

君かてをかれ行秋の末にしものかひにはなつ馬ろ悲しき

かなし家に久しう侍ける女のみゝ國にお

やの侍けるとふらふにまかりけるに

今はとて立かへり行故郷のふはのせきちにみやこ忘るな

どをさくにしまかりける人になひのくつか

はしけるかゝみてはこのうらにかきつけて

つかはしける

身をわくる事のかたさにます鏡影はかりをを君にそへつる

ねはへかののいよし

このたひいてたちなん物うくおほゆるとい

ひければ

はつかりの家も空なるほどなれば君も物うき旅にやあるらん

よみひとしらす

あひしりて侍ける女の人の國にまかりける

につかはしける

いとせめて戀しさ様のから衣ほどなくかへす人もあらなん

公忠朝臣

返し

から衣たつ日をよろに聞人はかへすばかりのほども戀しき

女

三月はかりこしの國へまかりける人にさけ

たうへけるつゝめてに

戀しくはことつてもせむかへるさのかり金はまつ我やどになけ

讚人不知

善祐法師の伊豆のくにをかされ侍けるに

別てはいつあひみんと思ふらん限あるよのいのちどもあし

いせ

題しらす

そむかれぬ松の千年の程よりもとくたにしたはれをせし

よみひとしらす

返し

ともしくとしたふ涙のうふれはいかある色にみゐて行らん

亭子院の傍門れり井給ふとるとしと秋弘嶺

殿のかへにかきつけける

わかるれどあふもれしまる百敷をみさらん事の何か悲しき

いせ

みかど侍覽して返返し

身ひとつにあらぬまかりをいしあへて行めぐりてもなとかみさらん

みちのくにへまかりける人にあふきてらし

てこたへゑにかゝせ侍ける

別行道の雲井に成ゆけはとまる心も空にこそなれ

よみひとしらす

むねゆきの朝臣のむすめみちのくにへいだ

りけるに

いかて猶かさどり山に身をなして露けきたひにろはんどろ思ふ

返し

かさどりの山と頼みし君をたきて涙の雨にぬれつゝろ行

れどこのいせのくにへまかりけるに

君か行かたにありてふ涙川まつはろてにろなかるへらこ
たひにまかりける人にさうろくつかはすと
てろへてろかはしける

袖ぬれて別はすともから衣ゆくどないひろきたりとをみん
返し

別ちは心もゆかすらか衣きては浪ろさきに立ける

たひにまかりける人にあふきつかはすとて

ろへてやるあふきの風し心あらは我思ふ人のてをなはなれろ

丈則かむすめのみちのくにへまかりけるあ

つかはしける

君をみのしのふの里へ行ものをあひつの山のはるけさやあろ

つくしへまかるとてきよいこの命ふにをく

りける

としをへてあをみる人の別にはれしき物ころ命かりけれ

出羽よりせほりけるにこれかれむまのはな

むけしけるにかはらけとりて

行さきをしらぬ涙悲しきはたゝめのまへにねつるこけり

平のたかどをかいやしきあとりて人の國へ

藤原滋翰か女

小野好古朝臣

源わたる

まかりけるにわするなといへりければたか
どをかつまのいへる

忘るなといふになかるゝ涙川うきなをすゝくせどもあらん

あひしりて侍ける人のあからさまにこしの

國へまかりけるにぬさ心すとて

我をのみ思ひつるかのこしならばかへるの山はまとはさらし

かへし

よみをとしらす

君をのみいつはたと思をこしおれはゆかさゝの道ははるけからしを

秋たひにまかりける人にぬさをもみちの枝

につけてつかはしける

秋ふかく旅行人の手向にはもみちにまざるぬさをまかりけり

西四條の齋宮の九月晦日くたう侍けるとも

なる人にぬさつかはすとて

紅葉はさぬさと手向てちらしつゝ秋といらにやゆかんとすらん

物へまかりける人につかはしける

待侘て戀しくからは尋ぬへく跡なき水の上からてゆけ

たいしらす

こむとらひて別るゝたにも有物をしらぬけさのましてこをしさ

大 輔

い せ

贈太政大臣

君か行かたにありてふ涙川まつはるてにろなかるへらこ

たひにまかりける人にさうろくつかはすと

てうへてうかはしける

袖ぬれて別はすともから衣ゆくどないひろきたりとをみん

返し

別ちは心もゆかすらか衣きては浪ろさきに立ける

たひにまかりける人にあふきつかはすとて

ろへてやるあふきの風し心わらは我思ふ人のてをなはなれろ

丈則かむすめのみちのくにへまかりけるあ

つかはしける

君をみのしのふの里へ行ものをあひつの山のはるけきやあろ

つくしへまかるとてきよいこの命ふにをく

りける

としをへてあをみる人の別にはれしき物ころ命ありけれ

出羽よりればほりけるにこれかれむまのはな

むけしけるにかはらけとりて

行さきをしらぬ涙れ悲しきはたゝめのまへにねつるこけり

平のたかどをかいやしきまどりて人の國へ

藤原滋翰か女

小野好古朝臣

源わたる

まかりけるにわするなといへりければたか

どをかつまのいへる

忘るなといふになかるゝ涙川うきなをすくせともあらん

あひしりて侍ける人のあからさまにこしの

國へまかりけるにぬさ心さすとて

我をのみ思ひつるかのこしならばかへるの山はまとはさらまし

かへし

よみをとしらす

君をのみいつはたと思をこしおれはゆかさゝの道ははるけからしを

秋たひにまかりける人にぬさをもみちの枝

につけてつかはしける

秋ふかく旅行人の手向にはもみちにまざるぬさをかりけり

西四條の齋宮の九月晦日くたり侍けるとも

なる人にぬさつかはすとて

紅葉はきぬさと手向てちらしつゝ秋どいらにやゆかんとすらん

物へまかりける人につかはしける

待侘て戀しくならは尋ぬへく跡なき水の上あらてゆけ

たいしらす

こむといひて別るゝたにも有物をしらぬけさのましてこをしさ

大 輔

い せ

贈太政大臣

さらばまど別し時にいはませば我も涙におほしれおまし
春霞はかなく立て別とも風より外に誰かどふへき

返し

い せ
よみひとしらす

めにみぬぬ風に心をたへつゝやは霞のへたてころせめ

い せ

かひへまかりける人につかはしける

君か代はつるのこほりにあらてきねさためおきよのうたかをもあぐ

舟にてもものへまかりける人につかはしける

をくれすそ心にのりてこかるへき浪にもとめよ舟みぬすとも

返し

舟なくは天の川まで来てんこきつゝしほの中に消すは

よみひとしらす

ふねにて物へまかりける人

かねてより涙う袖を打ぬらすうかへる舟にのらんと思へは

かへし

をさへつゝ我は袖にうせきとむる舟こそ鹽にささしと思へは

い せ

とをさ所にまかるとて女れもとへつかはし

ける

忘れしとことに結て別るればあひみん迄は思ひみたるれ

貫 之

橋旅歌

ある人いやしきおどりて遠江國へまかると
てはつせ川をわたるとて讀侍ける

はつせ川渡るせさへやにこる覽よにすみかたき我身と思へは

よみひとしらす

たはれしをみて

なにしたはゝわたにう思ふたはれ鳴浪のぬれきぬいくよきつらん

東へまかりけるにすかさぬるかた戀しくお

はぬける程に川をわたりけるに浪の立ける

をみて

いとしく過行かたの戀しきに浦山しくもかへる浪哉

業平朝臣

白山へまうてけるにみちなかよりたよりの

人につけてつかはしける

宮こ迄音にふりくる白山はゆきつきかたき所へけり

よみひとしらす

おかはらのむねきかみの國へまかりきた

り侍ける道に女の家をやどりていひつきて

さりかたぐおはぬければ二三日侍てやむこ

とさき事によりてまかり立ければ衣をつゝ

みてくれかうへにかきて送り侍ける

山里の草はの露はしけからんみのしる衣ぬはす共さよ

中原宗興

土左よりまかりのほりける舟のうちにてみ
侍けれに山のごちあらて月の浪のあかより出
るやうに見へければ昔安倍のなかまろかも
ろこしにてふりさけ見ればといへる事を思
ひやりて

貫之

宮にて山のはに見し月おれと海より出て海にころいれ
て
法皇宮の瀧といふ所御らんしける湯どもに

菅原右大臣

水引の白糸はへてをるはたはたひの衣にたちやかさねむ
道まかりけるつゐてにひくらしの山をまか
り侍て

日くらしの山路をくらみさよ更てこの末ことにもみちてらせる

はつせへまうつとて山のへといふわたりに
てよみ侍ける

いせ

草枕たると成なは山のへに白雲ならぬ我やいとらん

みつもせにぬきぬる時はしからみのうちのどのともみぬぬもみちは
うみのほどりにてこれかれせうぬうし侍け

るつゐてに

花咲てみならぬ物はわたつ海のかさしにさせる沖津白浪

小町

あつまなる人のもとへまかりけるみちにさ
かみのあしからの關にて女の京にまかりの
ほりけるにあひて

眞靜法師

あしからの關の山路を行人はしるもしらぬもうどからぬ哉
法皇とをき所に山ふみし玉ふて京にかへり
給ふにたひのやどりし給ふて湯どもにさふ
らふ道俗に歌よませたまふけるに

僧正聖實

人ことにけふとこのみ戀らるゝ都近くもなりにけるかな
土佐より任はてゝのほり侍けるに舟の中に
て月をみて

貫之

照る月のなかるゝみはれば天河出るみなとそうみにう有ける

亭子院湯製

草枕もみちむしるにかへたくは心をくたく物ならましや
京に思ふ人侍て遠き所よりかへりまうてさ
けるみちにどゝまりて九月斗に

識人しらす

思ふ人有てかへればいつしかのつまつよひの秋悲しき

草枕ゆふてはかりは何かれや露も涙もをき歸りつゝ

みやのたきといふ所に法皇おはしましたり

けるにおほせことありて

秋山にまどふ心をみやたきの瀧のしらおはにけちやはてゝ

後撰和歌集巻第二十

賀歌 哀傷

ろせいほうし

女八のみこ元良のみこの爲に四十の賀し侍

けるにきくの花をかさしに折て

萬よの霜にも枯ぬ白菊をうしろやすくもかさしつる哉

典侍あきらけいこ父の宰相の爲に賀し侍け

るに玄朝法師のもから衣ぬひくつかはしけ

れは

藤原伊衡朝臣

雲分る天のは衣打きては君がちとせにあはさらめやは

題しらす

典侍あきらけいこ

今年より若なにろへておまのよに嬉しき事をつまんどそおもふ

のりあきらのみこかふりしける日あろをし

太政大臣

侍けるに右大臣これかれ歌よませ侍けるに

この音も竹も千とせの聲するは人の思ひもかよふにけり

つらゆき

賀のやうあることし侍ける所にて

百とせといふを我はきくながら思ふか爲はあかす有ける

讀人しらす

左大臣家のおのこ女子かうふりしもかさ侍

けるに

大はらや小盃の山の小松原はや木高かれ千世の影みん

貫之

人のかうふりする所にて藤の花をかさして

打よするあみの花ころ咲にけれ千世松風や春にゑるらん

よみ人しらす

女のもとにつかはしける

君か爲松れ千とせもつきぬへし花よりまさる神の代もかあ

年星をこなふとて女檀越のもとよりすゝを

かりて侍ければくはへてつかはしける

百とせにやすとせろへて祈ける玉のしるしを君みさらめや

左大臣の家にろろく心さしをくるとてく

はへける

けうろくをさへてまさへ萬世に花の盛を心しつかに

今上唄のみこときこぬし時太政大臣の家に

わたりおはしましてかへらせ給ふ湯をくり

ものに湯木たてまつるとて

僧都仁教

ゆいせい法師

君か爲いはふ心のふかければひしりのみよの跡ならへどろ

太政大臣貞信公

返し

をしへかく事たかはすは行末の道遠く共跡はまどし

今上 彦製

今上梅壺にねはしましし時たき木こらせて

奉り給ける

山人のこれるたき木は君か爲おはくの年をつまんどろ思

返し

年の數つきむとすなるおもにはいとこつけをこりもろへあん

彦製

東宮の彦前にくれ竹うへさせ給けるに

君か爲うつしてうふるくれ竹にちよもこもれる心ちころすれ

きよたし

院の殿上にてみやの彦方より恭盤いたさせ

給ひけるこいしけのふたに

をのゝのくちんもしらす君かよのつきん限は打心せよ

命婦清子いささよき子

西四條のみこの家の山にて女四のみこのも

とに

あみたてる松の緑の枝はかす折つゝ千世を誰どかはみん

右大臣

十二月はかりにかうふりする所にて

いはふ事ありどなるへしけふあれど年のこなたに春もきにけり

つらゆき

哀傷歌

あつどしか身まかりにけるまたさかて東よ

りむまをくくりて侍ければ

またしらぬ人もありけり東路に我も行てろすむへかりける

左大臣

あにのふくにて一條にまかりて

春のよの夢のうちにも思をさや君なき宿を行てみんとは

太政大臣

返し

宿みればねても覺ても悲しくて夢現共わかれさりけり

先帝おはしまさて世中思を歌てつかはしけ

る

はかなくてよにふるよりは山しきの宮の草木とあらまし物を

三條右大臣

返し

山しきの宮の草木と君あらは我はしづくにぬるはかりに

兼輔朝臣

時もちの朝臣みまかりて後ばての比ちかく

成て人のもとよりいかに思ふらんどいをを

こせたりければ

別にし程をはて共れもはぬす戀しき事の限なければ

時望朝臣妻

女四のみこのふみの侍けるにかきつけて内

侍のかみに

たねもなき花にちらね宿も有をあとか形見のこたになからん

右大臣

返し

結ひをさしたねをらね共見るからにいと忍ぶの草を摘哉

内侍のかみ

女四のみこの事とふらひ侍とて

とらよを聞か中にも悲しきは人の涙もつきやしぬらん

いせ

返し

聞人と哀てふなる別にはいと涙うつきせさりける

讀人しらす

先帝おはしまさて又のとしの正月一日に送り侍ける

徒にけふや暮なんあたらしき春のはしめとむかしなからに

三條右大臣

返し

なく涙ふりにし年のころもてはわたらしきにむかはらさりけり

兼輔朝臣

かさねつかはしける

人のよの思ふにかなふ物あらは我身と君にをくれましやは

三條右大臣

女の身まかりて後すみ侍ける所のかへにか

兼輔朝臣

の侍けるときかきつけて侍ける手をみ侍て

ねぬ夢に昔のうへをみてしより現に物も悲しかりける

兼輔朝臣

は

あをしりて侍ける女の身まかりにけるをこ
を侍けるあひたに夜ふけてをしの鳴侍けれ

夕されはねに行をしの獨して妻こひすある聲の悲しき

関院左大臣

七月はかりに左大臣のはし身まかりにける

時に思ひに侍けるあをたきさいの宮より萩

の花をわりて給へりければ

女郎花枯にし野へにすむ人はまつ咲花をまたてともみす

太政大臣

あくちりにける人の家にまかりてかへりて

のあしたにかしこなる人につかはしける

なき人の影たにみぬぬやり水のろこに涙をなかしてろこし

いせ

やまどに侍ける母身まかりて後かのくにへ

まかるとて

獨行こところうけれ故郷のならのならひてみし人もあし

法皇はゆふくなりける時にひいろのさいて

にかきて人にをくり侍ける

しら波のこきもうすきもみる時はかさねて物も悲しかりける

京極彦息所

女四のみこのかくれ侍にける時